



第
497
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第497集

松

ヶ

崎

遺

跡

Ⅲ

二
〇
一
一

青
森
県
教
育
委
員
会

松ヶ崎遺跡Ⅲ

—一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2011年

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第497集

松ヶ崎遺跡Ⅲ

—一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2011年

青森県教育委員会



北東から調査区を望む（左中から右上にのびるのが八戸南環状道路）



南東から調査区を望む

口絵

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成8年度から一般国道45号八戸南環状道路建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。平成8年度の弥次郎窪遺跡をはじめとして、これまでに八戸市管内で10遺跡を順次調査・報告してまいりました。平成21年度は松ヶ崎遺跡と弥次郎窪遺跡の調査を実施しました。

松ヶ崎遺跡は縄文時代前期から中期の遺跡として古くから知られており、昭和40年代から現在に至るまで、音喜多富寿氏、光星学院高校、八戸市教育委員会、青森県教育委員会などによって発掘調査が実施されてきました。その過程で、当初は別の遺跡として登録されていた西長根遺跡と一体の遺跡であることが判明し、遺跡登録範囲は約300,000㎡に及ぶ広大なものとなりました。また、大量の遺構・遺物が発見され、遺跡の変遷なども次第に明らかになってきています。

本報告書は、平成21年度に実施した松ヶ崎遺跡の調査結果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居跡4軒、土坑4基、落とし穴4基、平安時代の竪穴住居跡1軒などが発見されました。これまでの調査の結果と併せて、調査区の周辺は松ヶ崎遺跡の縁辺部にあたることがわかり、その様相を明らかにすることができました。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成23年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 新岡 嗣浩

例 言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所による一般国道 45 号八戸南環状道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成 21 年度に発掘調査を実施した八戸市松ヶ崎遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は 3,800 m²である。
- 2 本書は、青森県埋蔵文化財調査報告書第 291 集『松ヶ崎遺跡』、青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第 377 集『松ヶ崎遺跡』に次いで松ヶ崎遺跡の 3 冊目の発掘調査報告書であり、書名を『松ヶ崎遺跡Ⅲ』とした。
- 3 松ヶ崎遺跡の所在地は、青森県八戸市大字十日市宇風湊 9-1 外、青森県遺跡番号は 203068 である。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成の期間は以下のとおりである。

発掘調査期間	平成 21 年 8 月 4 日から平成 21 年 10 月 21 日
整理期間	平成 22 年 4 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日
- 6 本書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主幹能代谷征則、文化財保護主幹中村哲也が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

航空写真撮影	(株) シン技術コンサル
石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員 松山 力
炭化材の樹種同定	古代の森研究舎
放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所
遺物の写真撮影	土器 シルバーフォト
	石器 スタジオエイト
- 8 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 9 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土交通省国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図『八戸』・『三戸』、及び平成 8 年に青森県が作成した八戸都市計画図(1/2,500)を複写して使用した。
- 10 測量原点の座標値は世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。
- 11 挿図中の方位はすべて世界測地系の座標北を示している。
- 12 遺構については、検出順に、予め定めたその種類を示す略号と、通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりである。

S B 掘立柱建物跡	S D 溝跡	S E 井戸跡	S I 住居跡
S K 土坑	S N 焼土遺構	S Q 配石・集石遺構	S R 土器埋設遺構
S T 捨て場	S V 溝状土坑	S X その他の遺構	
- 13 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。

14 遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居跡等の炉等は 1/30、竪穴住居跡・土坑・溝状土坑等は 1/60 に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。

15 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

 黒色物質分布範囲  硬化面

16 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。

17 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には『新版標準土色帖』（小山忠正・竹原秀雄 編 1993 年度版）を使用した。

18 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。

P- 土器 S- 石器 C- 炭化材

19 遺物実測図には、原則として挿図毎に 1 から通しの図番号を付した。

20 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器は 1/3、礫石器は 1/3 または 1/4、剥片石器・陶磁器・錢貨は 1/2 に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。

21 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

礫石器： タタキ  スリ

22 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、各表毎に指示内容を示した。土製品、石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ（cm）・重さ（g）の順に表記した。（ ）内の数値は現存値である。

23 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。

24 遺物写真の縮尺は、原則として縄文土器は 1/3、礫石器は 1/3 または 1/4、剥片石器・陶磁器・錢貨は 1/2 に統一し、各図版毎にスケール等を示した。

目次

序

例言

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	4
第2章 遺跡およびその周辺の地形・地質と歴史的環境	9
第1節 遺跡およびその周辺の地形・地質	9
第2節 歴史的環境	11
第3章 検出された遺構と遺物	12
第1節 検出遺構の概要	12
第2節 検出された遺構とその出土遺物	14
第3節 遺構外出土遺物	24
第4章 理化学的分析	34
第1節 松ヶ崎遺跡より出土した炭化材	34
第2節 松ヶ崎遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	35
第5章 まとめ	38
写真図版	39
抄録	
奥付	

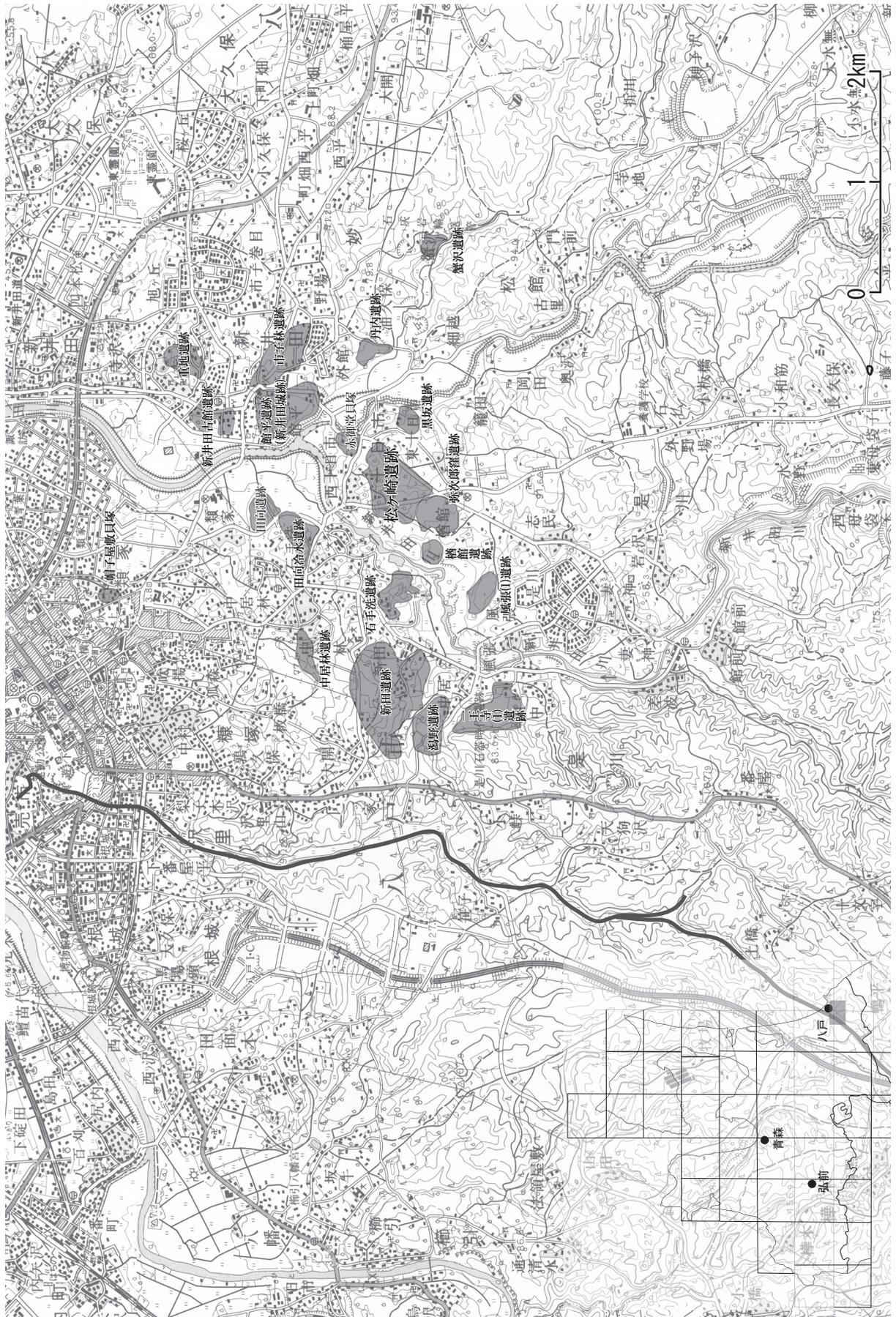


图1 遺跡位置图 (S=1/50,000)

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

松ヶ崎遺跡は数多くの調査が行われ八戸市教育委員会が住宅造成に伴う調査を行っている。県教育委員会は八戸南環状道路建設事業（国土交通省）に伴い平成11年7月5日から同年10月29日まで調査を実施し、青森県埋蔵文化財調査報告書第291集として刊行した。また、遺跡の北側地区で県道八戸大野線建設事業（青森県県土整備部道路課）に伴い平成14年10月7日から同年11月1日まで調査を実施し、青森県埋蔵文化財調査報告書第377集として刊行した。

その後、八戸南環状道路建設事業の一環として、県道新井田一差波線の改修工事が実施されることとなり、事業予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて平成20年度に至って国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所と青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）の協議が行われ、平成21年7月に現地協議を行い調査を実施することとなった。

なお当該事業に係る松ヶ崎遺跡については、平成21年5月6日付けで発掘に関する通知書の提出があり、平成21年6月9日付けで県教育委員会教育長から発掘調査の実施が指示された。（成田）

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

文化財保護課の試掘調査の結果から、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、遺跡の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッド設定〕グリッドの軸線は公共座標に軸を一致させることとし、平成11年度の青森県埋蔵文化財調査センターによる調査（青森県教育委員会 2001 『松ヶ崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第291集）のグリッドを踏襲することとした。平成11年度の調査においては、グリッド基点は、遺跡全体を包含するよう、かつ、X座標・Y座標とも整数部下二桁が00となる地点を選定した。各グリッドは、南から北にローマ数字とA～Yのアルファベット、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。その結果、グリッド基点ⅠA-0の座標値は旧日本測地系(第X系)でX=53,000.000 Y=57,500.000となった。その他例を挙げれば、ⅡA-100グリッドが(X=53,100.000 Y=57,900.000)、ⅧA-225グリッドが(X=53,700.000 Y=58,400.000)となった。平成21年度の調査では、調査対象区域を取り囲むように、4級測量基準点を測量業者に委託して設置した。測量原点は当該事業に伴って設置された4級基準点のB-5（世界測地系でX=53,520.121 Y=57,503.046）、T.8（X=53,618.084 Y=57,772.326）、T.9（X=53,682.426 Y=57,818.347）を利用した。新設点の成果計算方法は結合トラバース方式により、座標値は表1のとおりである。これを基に、公共座

表1 新設4級基準点成果表
*世界測地系

点名	X座標	Y座標	標高	点種
TA.1	53614.008	57720.734	35.007	木杭
TA.2	53594.198	57704.707	34.985	木杭
TA.3	53568.766	57687.762	35.387	木杭
TA.4	53536.600	57673.042	36.579	木杭

標第X系に軸を一致させた4m×4mのグリッドを設定した。現地においては、グリッドの目安となる20m四方の方眼杭を打設し、必要に応じ細かな方眼を打設した。ただし、グリッド設定時に平成11年度の測量成果が旧日本測地系によるものであることを失念し、世界測地系の成果として取り扱ったため、平成11年度に設定したグリッドとはずれが生じた。これに気がついたのが整理段階であったため、図3に平成11年度の成果によるグリッドと平成21年度に現地で設置したグリッドを示した。図3・6に示した平成11年度のグリッドは、旧日本測地系のグリッド座標を世界測地系に変換し、世界測地系で示された図

中に表示した。また、主要なグリッドライン交点の旧日本測地系と世界測地系の座標値の対応を表2に示した。座標値を変換するに際して、国土地理院が公開しているフリーソフト「TKY2JGD」を利用した。変換の結果、同一線上にあるべき点が若干ずれるなど多少の誤差があるが、その誤差は図示した範囲では、およそ数百mにつき数cm程度であり、実用上は無視しても差し支えない。そこで、図上では世界測地系の座標軸にあわせて作成したグリッドラインを平行移動させた。

その他の挿図中に示したグリッドは平成11年度調査のグリッドに修正したものを示し、座標値は

表2 平成11年度グリッド座標値対応表

グリッド名	旧日本測地系(Tokyou Datum)		世界測地系 (JGD2000)	
	X	Y	X	Y
I A-0	53000.000	57500.000	53306.5141	57201.2738
VII A-0	53600.000	57500.000	53906.5103	57201.2832
II A-75	53100.000	57800.000	53406.5101	57501.2655
VII A-75	53600.000	57800.000	53906.5061	57501.2731
I A-100	53000.000	57900.000	53306.5101	57601.2606
IV A-100	53300.000	57900.000	53606.5075	57601.2651
VII A-100	53600.000	57900.000	53906.5048	57601.2696
III A-125	53200.000	58000.000	53506.5074	57701.2602
IV A-125	53300.000	58000.000	53606.5064	57701.2617
VII A-125	53600.000	58000.000	53906.5035	57701.2661
III J-130	53236.000	58020.000	53542.5068	57721.2601
VII A-200	53600.000	58300.000	53906.4995	58001.2555

世界測地系に変換したものを示した。遺物観察表中のグリッドは、平成11年度調査のグリッドに変換したものを「修正後」として示した。

レベル原点も、既存成果のSBM.2(地盤高45.111m),SBM.3(地盤高50.046m)を与点として各4級基準点に標高を設置した。〔基本土層〕遺跡の基本土層については、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。〔表土等の調査〕文化財保護課の試掘調査により、表土は遺物が希薄であることが分かったので、重機を併用して掘削の省力化を図ったが、重機導入までの期間は人力で掘削を行った。遺物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。〔遺物包含層の調査〕上層から層位毎に人力で掘削した。遺物は散発的に出土したので、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。〔遺構の調査〕検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査したが、それぞれの開始番号は青森県埋蔵文化財調査報告書第291集『松ヶ崎遺跡』に連続させることとした。松ヶ崎遺跡はこれまで八戸市教育委員会により14地点、青森県教育委員会により2地点(青森県埋蔵文化財調査センターにより1地点、青森県教育庁文化財保護課により1地点)の調査が行われてきた。異なる地点で同

じ遺構名が使用される場合もあり、将来的には遺構を識別する際に不都合を生じる可能性も考えられる。各調査機関とも共通の規則の下に遺構名称を割り振り、異なる地点で同じ遺構名が用いられないようにすることが理想ではあるが、実際には困難が伴う。同じシリーズ名を採用する報告書で遺構名が重複しないようにすることが次善の策ではあるが、青森県埋蔵文化財調査報告書第291集と第377集では既に遺構名が重複している。そのため、青森県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査の報告書である第291集に連続させることとした。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に簡易遣り方測量で、縮尺1/20を基本として作成した。遺構の堆積土層断面図や竪穴住居跡に伴う炉等の平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易遣り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に取り上げたが、焼失住居の炭化材や炭化材と同一層位の遺物、炉の出土遺物については、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。〔写真撮影〕写真撮影には原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル各フィルム及び1220万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。また、業者に委託してラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。

2 整理作業の方法

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡4軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代の土坑4基、縄文時代の溝状土坑4基、時期不明の溝跡3条が検出された。また、縄文時代を中心とし、古代から近世に至る遺物が段ボール12箱分出土した。遺構・遺物の大部分をしめる縄文時代集落の時期・構造等を解明するため、竪穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕整理作業では遺構の平面図と堆積土層断面図や炉等の付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。〔写真類の整理〕35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕縄文時代の遺構出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等の直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。〔遺物の観察・図化〕遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。特に、縄文土器の復元個体については、可能な限り（拓本を使用せず）実測図を作成するようにした。また、遺物台帳・観察表・計測表等

を作成した。〔遺物の写真撮影〕業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。〔理化学的分析〕竪穴住居跡の建築材を特定するための炭化材の樹種同定、炭化材の年代測定を業者に委託して行った。〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、(株) CUBIC 製「トレースくん Cubic」「遺物くん Cubic」を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成もデジタルデータによる編集を採用した。〔遺構の検討・分類・整理〕各遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。〔遺物の検討・分類・整理〕遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。〔調査成果の検討〕遺構・遺物の検討結果を踏まえて、遺跡の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

1 発掘作業の経過

平成21年度の当該事業は、8月4日から10月28日までの予定で実施することになった。発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター
所長	新岡 嗣浩
次長	工藤 大（平成22年3月退職）
総務 GM	木村 繁博
調査第一 GM	成田 滋彦
文化財保護主幹	中村 哲也（発掘調査担当者）
文化財保護主事	澤田 恭平（発掘調査担当者 平成22年3月退職）
調査補助員	鈴木 貴仁（平成22年10月退職） 木村 崇志（平成23年2月退職） 佐々木香澄（平成23年1月退職） 大谷 望
専門的事項に関する指導・助言	
調査指導員	村越 潔 国立大学法人 弘前大学名誉教授（考古学）
調査員	松山 力 八戸市文化財審議委員（地質学） 関根 達人 国立大学法人 弘前大学人文学部准教授（考古学）（現人文学部教授）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

平成21年度に文化財保護課が行った試掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡が確認されているので、表土から順次掘り下げて、縄文時代の遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。

7月22日、国土交通省青森河川国道事務所（調査委託者）、文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。当該地区は既に工事が発注済みで、発掘調査が必要な区域は休工扱いとなっており、工事に伴い発生する作業（表土除去、床掘、排土移動など）は国土交通省側で負担すること、その日程については随時打ち合わせすることを確認した。併せて、前年度から要望していた事務所や作業員休憩棟、器材庫、駐車場用地を事業用地内に確保する件は、大

部分を調査区から約 500 m 離れた八戸南環状道路本線予定地内に設置することとなり、工事計画との関連もあって、造成は委託者側で実施することとなった。周辺は一般道で交通量が多いため、器材庫は調査対象区域内に設置することとなった。調査対象区域は旧果樹園・旧畑地が大半だが、一部には民家の出入り口や駐車場（図 3：3 区・4a 区・4b 区）を含んでおり、出入りについて配慮が求められた。特に、自動販売機が設置された民家前（4a 区）は営業の妨害とならないよう、調査方法を慎重に検討すべきであることを確認した。

7月下旬、プレハブ・駐車場用地の造成が終わり、7月下旬～8月初旬、重機を用いて表土除去・器材庫設置場所の造成を行った。この際、3区には0.7立米のバックホーによりトレンチを設定したが、3m以上の厚さで盛土が施されていることが判明した。調査区の幅や電柱などの障害物を考慮すると、安全を確保した上で掘削を実施することは不可能であったため、精査は行わないこととした。8月3日までは調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置を終了した。8月4日、発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査区域の南部から発掘作業を開始した。8月上旬、測量基準点・水準点を、(有)三浦測量に委託して設置し、これに基づいて20m単位のグリッド杭を打設した。ただし、旧日本測地系に準拠した平成11年度のグリッドとはずれが生じていたことは前述のとおりである。9月中旬、全体としては遺構・遺物の密度が低いため人員配置に余裕があり、文化財保護課を通じて調査委託者に、近接する弥次郎窪遺跡の本調査を実施することを打診し、了解を得た。9月29日より、一部の人員は弥次郎窪遺跡で調査を開始した。9月下旬、重機により、4b区の試掘を実施した。その結果、若干の遺構・遺物が検出された。また、当該区域は盛土が厚く、遺構検出面まで1.5m～2.2m程度の深さがあることが判明した。当該地区は歩道に隣接し、本格的な掘削を行った場合、防護措置が欠かせないため、ガードフェンスの設置が終了し次第、掘削・排土運搬を開始することとした。また、遺構・遺物の分布状況から、市道を挟んで隣接する4a区も発掘調査を実施することとした。ただし、前述のような事情から、住居への出入り、自動販売機へのアクセスの障害にならない範囲を掘削することとし、地権者の了解を得た。10月上旬、ガードフェンスを設置し、重機による掘削・排土運搬を行った。その結果、4b区の約40㎡は深さに比して幅が狭いため、安全基準を満たす法面勾配を確保できず、縄文時代の住居跡と思われる遺構を確認したが、精査は実施しなかった。10月16日、4地区の調査を終え、これ以降、埋め戻しを開始した。10月21日には残っていた2地区の遺構の精査を終え、弥次郎窪遺跡の調査に全面的に移行した。10月28日、一部を現地のプレハブに保管し、器材を撤収した。精査終了後の10月29日、ガードフェンス、器材保管庫をのぞくプレハブ等すべての器材を撤収した。11月10日、所轄の警察署に文化財保護課から遺物発見届を提出した。

2 整理・報告書作成作業の経過

平成21年度の松ヶ崎遺跡発掘調査では、縄文時代の遺構が12基（うち1基は精査せず）、古代の遺構が1基、縄文時代を中心とする遺物が段ボール箱で12箱出土した。報告書刊行事業は平成22年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は、発掘作業終了後の平成21年11月に終了している。また、遺物の洗浄・注記は平成22年3月までに終了した。この他の整理・報告書作成作業は平成22年4月1日から平成23年3月31日までの期間で行った。松ヶ崎遺跡は縄文時代と古代～近世の複合遺跡であり、検出遺構の中では縄文時代の遺構が大多数をしめ、出土遺物の中では縄

文土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総ページ数は70ページで、この大半を縄文時代の遺構・遺物の記載にあてることにしたが、その他の時代の遺物についてももれなく抽出・記載するよう心がけた。

整理・報告書作成体制は以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 新岡 嗣浩

次長 畠山 昇

総務 GM 木村 繁博

文化財保護主幹 能代谷征則（報告書作成担当者）

文化財保護主幹 中村 哲也（報告書作成担当者）

整理作業員等 安田奈津季 増田 章子（平成22年9月退職） 高田 裕子 工藤 美香
熊谷 舞子（平成22年10月から）

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

4月上旬、遺物の接合・復元作業を進めた。併せて、グリッド別の遺物出土量を集計した。この間に、石器の報告書掲載遺物を選別した。5月中旬～、剥片石器の実測を開始した。7月上旬～、剥片石器のひとつおりの実測を終え、礫石器の実測を開始した。8月中旬～、土器の実測を開始した。この間、随時剥片石器の実測図の修正を行い、8月末日には剥片石器の実測を終了した。また、9月、炭化材のサンプル等を整理して古代の森研究舎に理化学的分析を委託した。10月上旬～、礫石器のひとつおりの実測を終え、土器の採拓を開始、ほぼそれに併行して礫石器・土器の実測図の修正と土器の実測を進めた。図化の指示は、土器・剥片石器・陶磁器を中村が、礫石器を能代谷・中村が行った。10月末～12月下旬、土器の実測と平行して、図化作業が終了した遺物から、順次トレースを行い、トレースが終了した遺構・遺物については、印刷用の版下を作成した。この間に、シルバーフォト・スタジオエイトに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。12月中旬、原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、1月下旬、印刷業者を入札・選定して入稿した。3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に、記録類・出土品を整理して収納した。（中村）



調査機関	名称	調査年	面積	報告書名	シリーズ名	刊行年
光星学院高校史学会	—	1966	約 16 m ²	八戸市大字十日市松ヶ崎貝塚		1967
音喜多富寿ほか	—	1970	400 m ²	八戸市松ヶ崎遺跡調査報告書		1972
八戸市教育委員会	1地点	1992	1780 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 7	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 61 集	1995
	2地点	1997	200 m ²	西長根遺跡発掘調査報告書	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 80 集	1999
	3地点	1999	140 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 12	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 83 集	2000
	4地点	1993	225 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 6	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 60 集	1994
	5地点	1994	24 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 7	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 61 集	1995
	6地点	1994	25 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 7	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 61 集	1995
	7地点	1994	155 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 8	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 65 集	1996
	8地点	1998	50 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 11	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 77 集	1999
	9地点	2000	191 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 13	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 87 集	2001
	10地点	2001	324 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 14	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 90 集	2002
	11地点	2001	310 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 14	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 90 集	2002
	12地点	2003	66 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 18	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 102 集	2004
	13地点	2007	160 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 25	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 117 集	2008
14地点	2009	19 m ²	八戸市内遺跡発掘調査報告書 27	八戸市埋蔵文化財調査報告書第 124 集	2010	
青森県埋蔵文化財調査センター	—	1999	3900 m ²	松ヶ崎遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第 291 集	2001
青森県教育庁文化財保護課	—	2002	420 m ²	松ヶ崎遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第 377 集	2004

図2 既往の調査と平成 21 年度の調査区位置図 (1/7, 500)

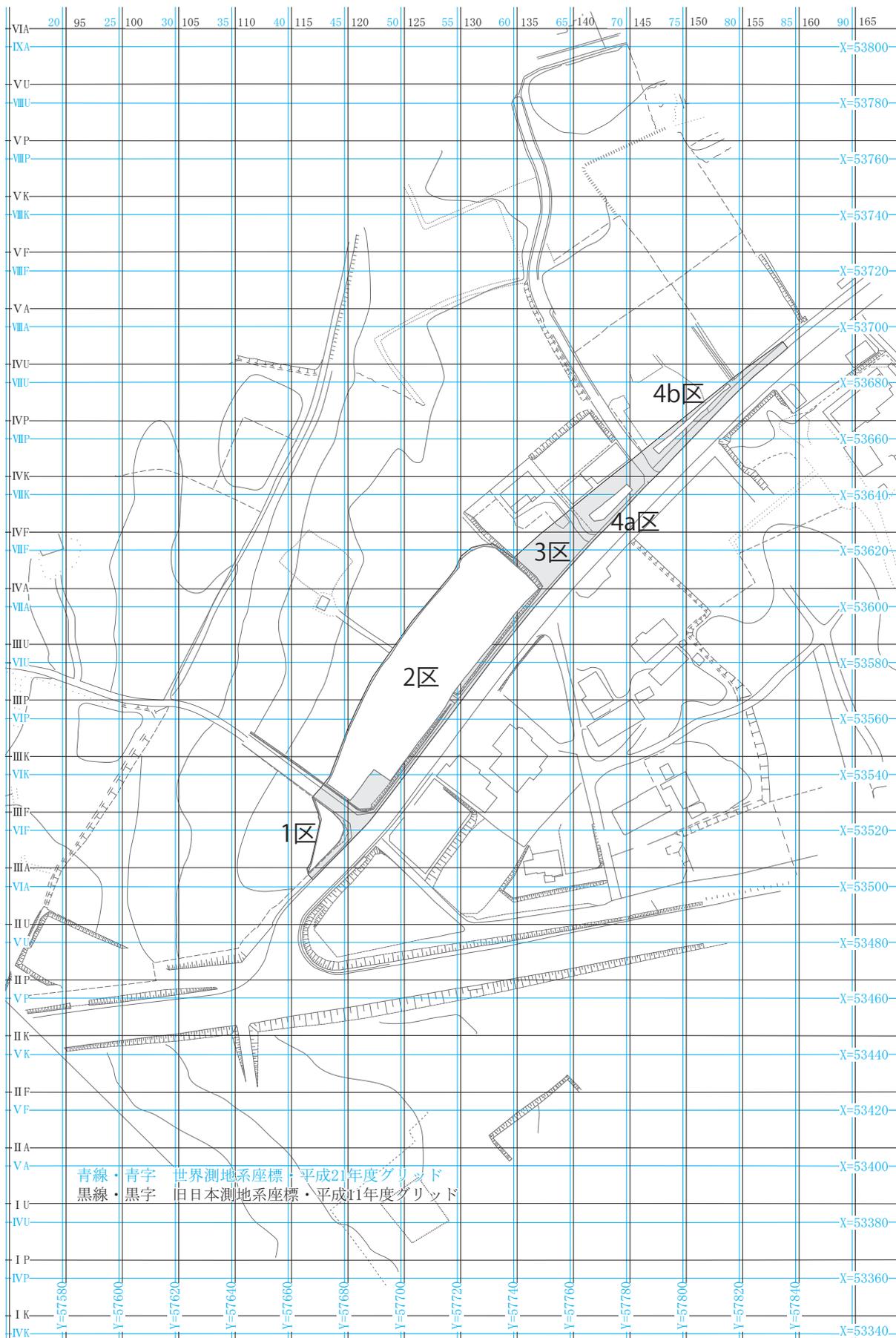


図3 グリッド関係図 S=1/2,000

第2章 遺跡およびその周辺の地形・地質と歴史的環境

第1節 遺跡およびその周辺の地形・地質

1 遺跡周辺の地形・地質

八戸市付近には段丘地形が発達することがよく知られている。馬淵川・新井田川両河川によって形成された河岸段丘、および、海岸沿いに形成された海岸段丘である。段丘群は、新井田川から太平洋岸に至る地域では、上位から蒼前平段丘、白銀平段丘・野場段丘（天狗岱段丘）、高館段丘（種市段丘）、根城・田面木・名久井の各段丘（低位段丘）、海岸・河谷平野に区分されている。各々の段丘の標高は蒼前平段丘が100 m以上、白銀平段丘が110～80 m、野場段丘が80～50 m、高館段丘が70～30 m、根城段丘が40～20 m、田面木段丘が10 m以上である。

また、この地域では最新世以降の火山灰が複数知られている。下位から天狗岱火山灰、高館火山灰、八戸火山灰、二ノ倉火山灰、南部浮石、中楸浮石、十和田b火山灰、十和田a火山灰、苫小牧-白頭山火山灰である。

上述の段丘群は上位のものほど形成年代が古く、最新世以降の火山灰と対応関係がある。天狗岱段丘群を構成する白銀平段丘、野場段丘は、天狗岱火山灰以降の火山灰をのせる。高館段丘は高館火山灰以降、根城段丘は高館火山灰層中位以降、田面木段丘は完新世の八戸火山灰以降の堆積物をのせる段丘である。

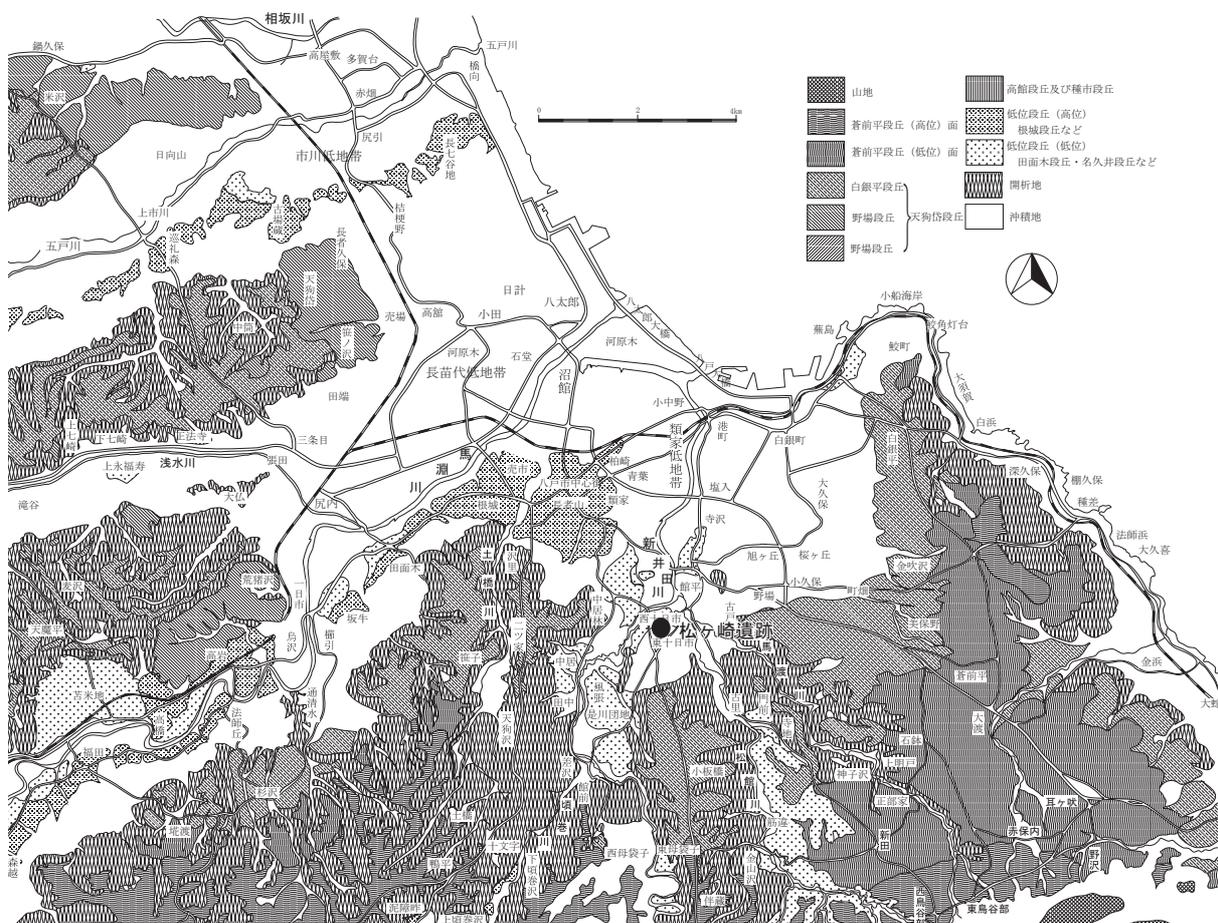


図4 八戸市付近の段丘区分図 (松山 1983 を再トレース)

本遺跡は八戸市街地から南南東約4kmの高館段丘上に位置する。遺跡の所在する台地の西を新井田川、東を馬渡川が北へ向かって流れ、遺跡の北方約900mの地点で合流する。これ以北には沖積低地が形成されている。

周辺地域の基盤岩は先第三期の古期岩類が主体である。太平洋岸には輝緑岩・玄武岩・安山岩などが見られ、階上岳山塊は主として花崗閃緑岩からなる。馬渡川と新井田川流域では粘板岩、チャート、石灰岩が主体となる。

2 遺跡の層序

平成21年度の調査区は遺跡登録範囲の東縁に当たり、調査前は畑、果樹園、宅地であった。宅地部分は1.5mないしはそれ以上の盛土が施され、旧地形が改変されていたが、全体として下谷地付近から1999年度埋蔵文化財調査センター調査区へと貫入する谷地形の北西側に位置し(図2)、旧地形は平坦面・緩やかに東へと下る緩斜面からなっていたものと推定される。

やや微視的に見ると、1区は前述の谷地形に近く、3区には枝谷が侵入していたようで、この付近では各土層が厚くなる。

遺構・遺物の状況から八戸火山灰層よりも上位の第V層を調査の最終面とし、それ以下は掘り下げなかった。

第I層 県道新井田・差波線に面した調査区東側では、盛土・旧耕作土と考えられる土層が厚く、これらをまとめて第I層とし、土層断面図作成箇所では4層に細分した。西側では地区により層厚が異なり、1区では約50cm、2区中央部付近で20cm程度である。

第I a層 10YR3/2 黒褐色シルト しまり弱い。垂円礫(φ5~10mm)3%。

第I b層 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 垂円礫(φ2~5mm)2%。10YR7/8 黄橙色浮石粒(φ1~2mm)3%。

第I c層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土質シルト。10YR8/2 灰白色浮石粒(φ1~2mm)1%。

第I d層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土質シルトがしみ状に混入。垂円礫(φ5~8mm)3%。しまりあり。

第II層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR8/1 灰白色浮石粒(φ2~5mm To-bと思われる)5%。層厚30cm前後。2区西側ではほとんど見られない。

第III a層 10YR2/1 黒色砂質シルト 粗粒で、中掬浮石起源と思われる黄褐色の微細粒子を含んでいる。層厚10~20cm程度である。ただし、西側では層厚10cm程度ないしそれ以下になる。

第III b層 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 10YR5/6 黄褐色浮石粒(φ2~5mm)3%。

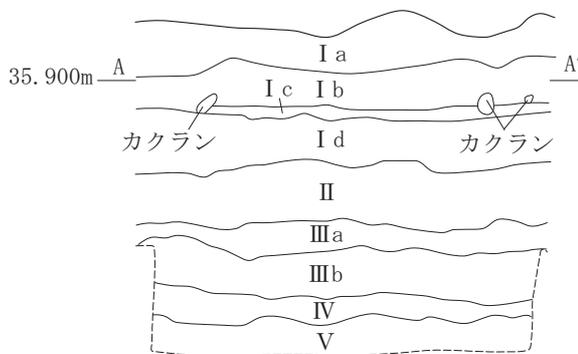


図5 基本層序

第Ⅲ a層と同質である。土層断面図作成部分では層厚 10～15cm。調査区西側では薄くなり、層厚 10cm 以下になる。

第Ⅳ層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石（φ 2～5mm）5%。土層図作成部分では層厚約 20cm だが、2区西側ではほとんど見られない。八戸市域では、層厚が厚い場合、この土層中に南部浮石と見られる浮石の集中が見られることがしばしばあるが、本遺跡では浮石は層中に散らばっている。

第Ⅴ層 10YR4/4 褐色シルト 10YR5/6 黄褐色浮石（φ 2～5mm）7%。緻密で堅い。

縄文時代の遺物が出土したのは第Ⅰ層～第Ⅲ層までで、遺構堆積土の状況などから第Ⅲ層が本来の包含層であったと考えられる。

第2節 歴史的環境

松ヶ崎遺跡周辺には多数の縄文時代の遺跡が知られている（図1）。縄文時代早期中葉の田向遺跡、館平遺跡、早期後葉の帽子屋敷貝塚、赤御堂貝塚、末葉の新井田古館遺跡など、早期の遺跡が新井田川と馬渡川の合流点に近接する位置に所在する。

円筒式期の遺跡は早期の遺跡に比較すると河川沿いや台地上のやや奥まった場所に位置するようになる。松館川の右岸には蟹沢遺跡、下流の新井田川右岸には重地遺跡、新井田川左岸には石手洗遺跡、一王寺(1)遺跡などが形成される。

松ヶ崎遺跡はかつて前期末葉の小貝塚（松ヶ崎貝塚）として知られていた。付近には中期の西長根貝塚と早期後葉の赤御堂貝塚があり、これらの貝塚の内容から、遺跡北方の沖積低地には縄文海進期に入り江が形成され、前期末葉以降、海退とともに鹹水域から汽水域へと変化したとの見解も示されている（江坂 1956）。

現在、松ヶ崎、西長根、両遺跡は統合され松ヶ崎遺跡となっている。複数回の発掘調査が行われ（図2）、その様相が次第に明らかになりつつある。遺跡の継続期間は、前期後半の円筒下層式期から中期末葉ないしは後期初頭である。遺跡北東部では円筒下層式～上層式前半の遺構・遺物が検出されている。遺跡中央部では中期後半の竪穴住居跡をはじめとする多数の遺構・遺物が集中して検出されている。中期末葉になると、現在判明している限りでは遺構の分布は散発的で、中期中葉～後葉とは占地が異なるらしい。中期末葉以降、周辺に赤御堂遺跡、黒坂遺跡などの集落が出現することを考えると、中期末葉には集落は分散傾向を示すものと思われ、松ヶ崎遺跡の盛衰と周辺の遺跡の消長は連動するようである。松ヶ崎遺跡を含む八戸市南部地域の前期後半以降の遺跡の変遷については青森県埋蔵文化財調査報告書第480集『笹子(2)遺跡』で述べてあるので、参照されたい。

弥生時代には弥次郎窪遺跡、榎館遺跡、風張(1)遺跡、田向冷水遺跡、中居遺跡、中居林遺跡などで住居跡が検出されている。田向遺跡では古墳時代の住居跡が検出されている。古代には丹内遺跡、風張(1)遺跡、市子林遺跡、中居林遺跡などで集落が検出されている。松ヶ崎遺跡でも古代の住居跡が検出されており、古代の集落が存在したことが判明している。

中世～近世には、新井田古館、新田城跡といった南部氏関連の遺跡が新井田川沿いに形成される。

（中村）

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 検出遺構の概要

調査区は南北に細長く、図3・6に示すごとく、便宜的に調査区を1～4に分けて記述する。

1区は東側の下谷地付近から侵入する弱い沢地形に連なる緩斜面である。3区は、表土除去作業時に掘削深度を確認するため、重機でトレンチを設定した。約3m掘削しても盛土が続いており、沢状地形に当たるものと判断された。2区は1区・3区の沢状地形に挟まれた平坦面である。4区は、1.5～2m程度の盛土がなされていた。4区の西から北に向けて平坦面ないしは緩斜面が続くと思われるが、県道差波―新井田線を挟んで東側は盛土が施されているようで、旧地形は東側で傾斜を強めるものと思われる。

平成21年度の調査では縄文時代の竪穴住居跡4軒、縄文時代の土坑4基、縄文時代の溝状土坑4基、古代の竪穴住居跡1軒、時期不明の溝跡3条が検出された。

縄文時代の遺構のうち、竪穴住居跡3軒と土坑4基、溝状土坑3基が2区北半にまとまるが、密度は低い。

平安時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代の溝状土坑1基が4b区で検出されたが、やはり密度は低いようである。

溝跡はいずれも東西方向に伸び、等高線に対して直行方向にあることから、排水が主な目的の一つであるとも考えられる。(中村)

表3 遺構計測表

・計測値が上下二段のものは、上段が開口部、下段が底面の値である。深さは断面図において、遺構の最も高い部分と低い部分の差をとった。
・溝状土坑の短軸は、長軸の1/2付近で計測した。 ・重複 新>旧 旧<新

遺構名	位置	検出層位	時代・時期	規模				重複	備考
				長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	面積 (㎡)		
第1号竪穴住居跡	Ⅲ U-130・131	V	縄文時代中期前葉	(2.72)	(2.49)	0.43	4.08		
				(2.47)	(2.25)				
第2号竪穴住居跡	Ⅳ A・B-130	V	縄文時代中期前葉～中葉	2.80	2.48	0.25	4.94		
				2.59	2.30				
第3号竪穴住居跡	Ⅳ A-131・132	V	縄文時代中期末葉	-	-	0.10	6.76		
				(3.19)	(3.14)				
第4号竪穴住居跡	Ⅳ M-147	IV	平安時代	(1.27)	(0.49)	1.18	0.73	>SV-5	
				(1.21)	(0.36)				
第5号竪穴住居跡	Ⅳ Q-151	V	縄文時代中期前葉	-	-	-			精査せず。
第8号土坑	Ⅳ A-131	V	縄文時代前期末葉～後期前葉	1.39	1.21	0.19			
				1.33	1.07				
第9号土坑	Ⅳ A-129	V	縄文時代前期末葉～後期前葉	1.04	0.93	0.81			
				0.74	0.71				
第10号土坑	Ⅲ R-129・130	V	縄文時代中期後葉	1.12	1.07	0.33			
				0.98	0.93				
第11号土坑	Ⅲ R-129・Ⅲ R-130	V	縄文時代前期末葉～後期前葉	1.39	1.29	0.41			
				1.19	1.00				
第2号溝状土坑	Ⅲ Y-128・Ⅲ X・Y-129	V	縄文時代前期後半以降	3.53	0.31	0.84			
				3.93	0.06				
第3号溝状土坑	Ⅲ R-128・129	V	縄文時代前期後半以降	4.00	0.46	1.38			
				3.69	0.14				
第4号溝状土坑	Ⅲ R・S-125	V	縄文時代前期後半以降	3.63	0.49	1.17			
				3.51	0.23				
第5号溝状土坑	Ⅳ M-147	IV	縄文時代前期後半以降	2.00	0.56	1.30		<SI-4	
				1.98	0.08				

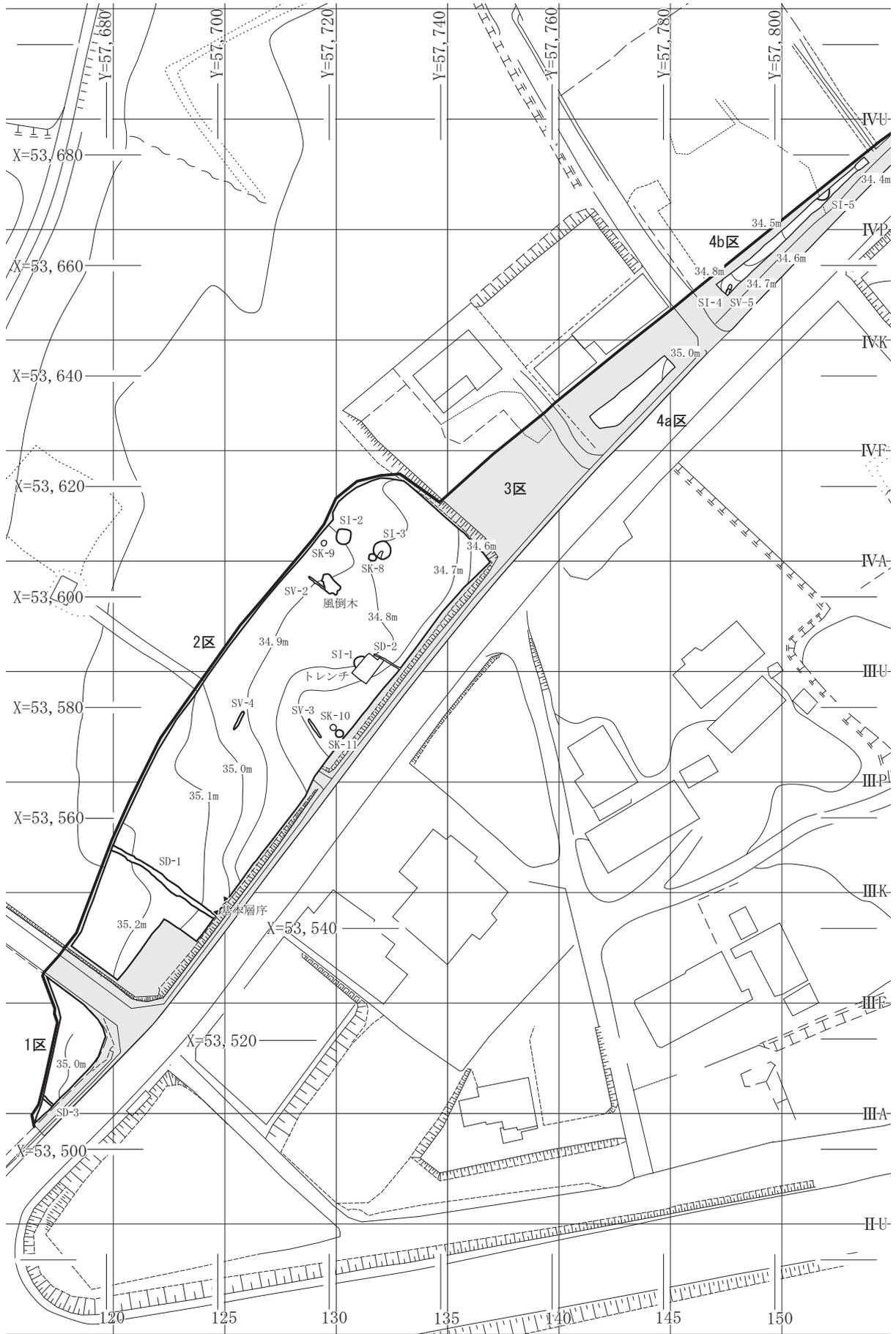


図6 遺構配置図 (1/1,000)

第2節 検出された遺構とその出土遺物

検出された各遺構の位置、規模等については一覧表（表3）にまとめ、その他の属性について記述する。

第1号竪穴住居跡（SI-1）〔図7・8〕

〔検出状況〕 試掘トレンチにより、南東側約1/2はほとんど床が露出した状態であった。北西側半分は、第Ⅲ層中で掘り方を検出したが、堆積土と掘り方の識別は困難を極めた。〔堆積土等〕 3層に分層した。壁際ほど堆積土と壁の土色が近くなり、壁との区別が難しい。3層とも主体となる土壌とは異なる色調の土壌を境界不明瞭な斑状に含み、自然堆積と考えられた。〔平面形〕 掘り方の1/2が不明であるが、円形、または楕円形を呈すると思われる。〔壁〕 やや外傾して立ち上がる。北西壁で高さ約40cmである。〔床〕 明瞭な硬化面は認められなかった。〔柱穴〕 柱穴は検出されなかった。〔炉〕 長径32cm、短径23cm、深さ6cmのピットに埋設された土器が床面中央から検出された。土器は胴部中位～口縁部を欠いており、床面からは3cm前後、上端をのぞかせていた。土器内外に明瞭な焼土は検出されなかったが、位置や埋設状況から考えて炉である可能性が高い。〔出土遺物〕 炉からは上述のとおり炉体土器が出土した。堆積土カクラン土層中から土器1片（9.9g）、第2層から敲磨器1点（727.7g）、自然礫1点（267.8g）が出土した。炉体土器内底面から胴部下位にかけて、炭素を吸着した3～5cmの黒色のバンドが認められる。それ以上は熱のためかやや赤変している。対応する外面も赤変が認められ器壁断面にも黒色帯は認められず、二次的な加熱を受けたものと考えられるが、容器としての使用時のものか、炉体に転用されてからのものかは不明である。胎土には微量の繊維を含む。〔時期〕 出土した土器から縄文時代中期前葉である。（調査：澤田 記載：中村）

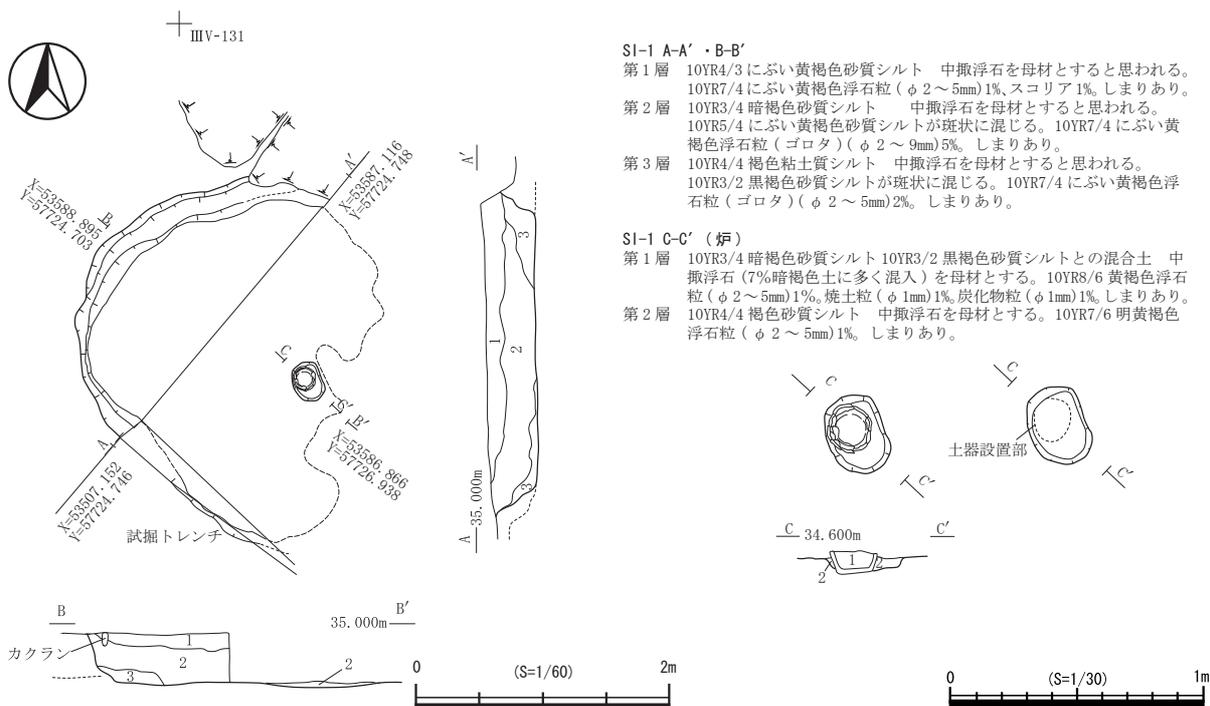


図7 第1号竪穴住居跡(1)

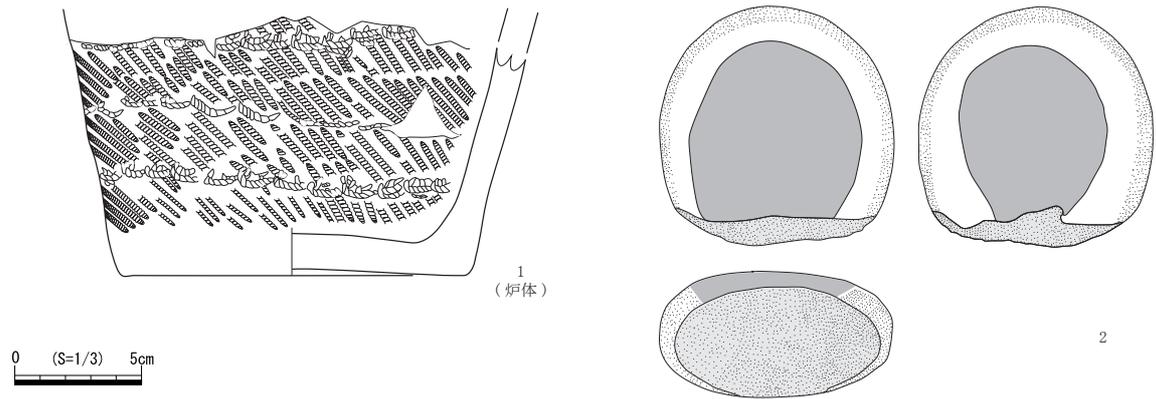


図8 第1号竪穴住居跡 (2)

第2号竪穴住居跡 (SI-2) [図9]

[平面形] 隅丸方形を呈する。[堆積土等] 3層に分層した。第1層、第2層は粗粒砂を含む黒褐色・暗褐色のシルトで、基本層序第Ⅲ層に類似する。第1層・第2層に比べて、第3層は砂が少なく、斑状構造が認められる。これらの特徴から自然堆積と思われる。[壁] やや外傾して立ち上がる。遺存状況は悪く、壁高は最大で20cm程度である。[床] 第Ⅴ層を床面とし、平坦である。床面の中心から壁に向かって約2/3まで硬化面が確認された。また、硬化面の大半と重複する形で床面が黒色に汚れていた。硬化面上にこびりつくようにごく薄く堆積していた。これを直接覆っていたのは第1層・第2層の砂質シルトなので、堆積土由来のものとは考えがたく、住居使用中に形成された可能性を考えたい。[柱穴] 柱穴は検出されなかった。[炉] 炉は検出されなかった。[出土遺物] 堆積土第2層中から土器5片(47.8g)、自然礫1点(3.4g)が、第1層から敲石1点(186.2g)・自然礫5点(124.2g)が出土した。また、床面から炭化材の小片が出土した。樹種はクリである(第4章第1節)。これを放射性炭素年代測定に供し、 $4,470 \pm 20\text{yrBP}$ の測定値を得ている(第4章第2節)。[時期] 本遺構に伴う放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代中期前葉～中葉と考えられる。(中村)

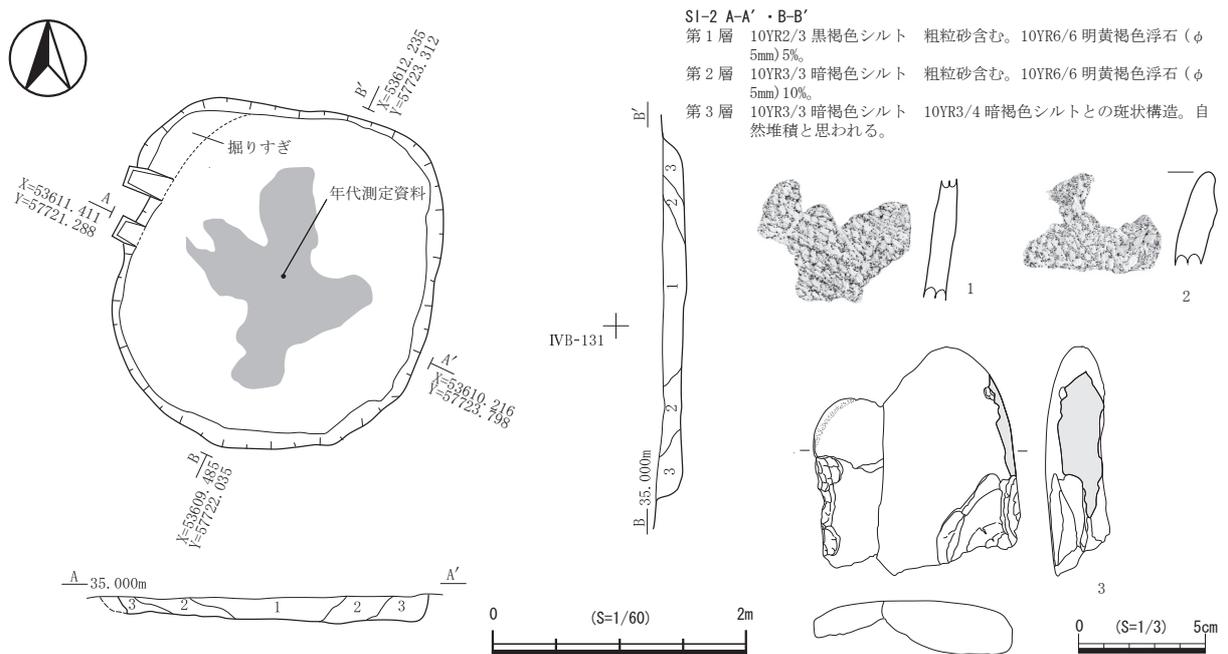


図9 第2号竪穴住居跡

第3号竖穴住居跡 (SI-3) [図10・11]

[検出状況] 盛土・耕作土を除去した段階で不整な円形の落ち込みを検出したが、結果的には床面の一部が露出した状態であった。[平面形] 円形を呈すると思われる。[堆積土等] 2層に分層した。[壁] 全周の1/4ほどが残存していた。[床] 周囲よりやや堅い面が円形に認められた。中心部には硬化面が認められた。[柱穴] 検出されなかった。[炉] 石囲部と前庭部からなる複式炉系列の炉を検出した。当初、炉の堆積土をカクランと誤認していたため、炉内の堆積土は図化できなかった。石囲部と前庭部は連続した掘り方で、底面に段差等の区画は認められない。石囲部の石は独立した掘り方を持たず、炉掘方の壁に並べてあった。石囲部・前庭部に焼土は認められなかった。石囲部を巡るように硬化面が検出され、前庭部の一部にも及んでいる。前庭部壁際には小ピットが検出された。また、前庭部底面にこびりつくような状況で黒色の物質が分布していた。[出土遺物] 第1層から土器16片(242.2g)・自然礫8点(186.5g)が、第2層から磨石・敲石各1点(計2632.1g)・剥片3点(1.7g)・自然礫4点(4103.0g)が出土した。[時期] 炉の型式から縄文時代中期末葉である。(中村)

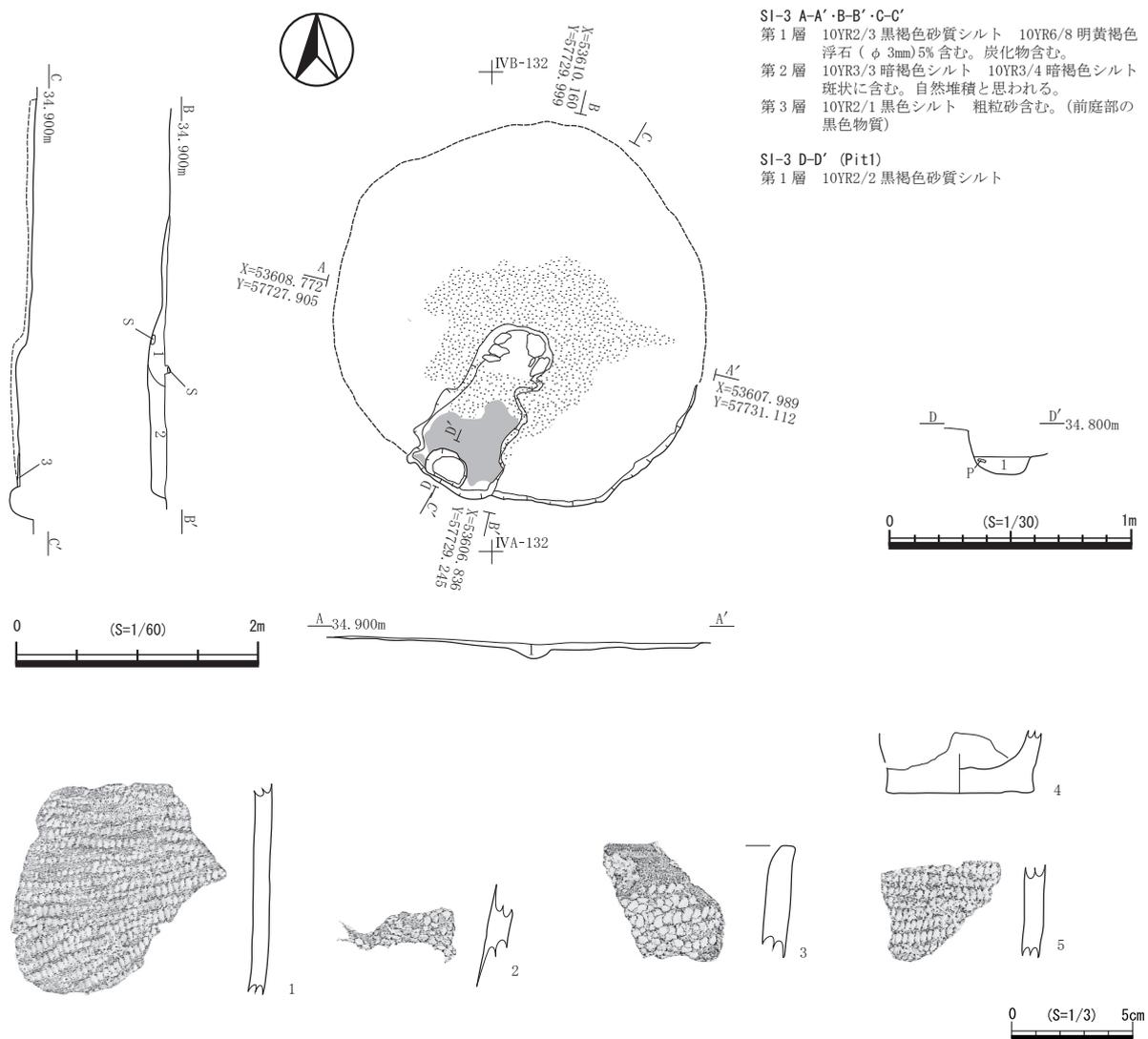


図10 第3号竖穴住居跡(1)

第5号竖穴住居跡 (SI-5) [図6、写真図版8]

本遺構周辺は盛土が厚く、調査区が狭長であったため、安全基準を満たした法面を設定できず、精査を行わなかった。概略の位置を遺構配置図(図6)に示した。平面形は円形または楕円形を呈すると思われる。確認面では円筒上層式土器が出土しており、縄文時代中期の所産である可能性が高い。(中村)

第8号土坑 (SK-8) [図13]

[堆積土] 3層に分層した。第3層は壁に類似した褐色シルト、第1・2層は基本層序第Ⅲ層に類似した砂質シルトで、自然堆積の可能性が高い。[形状] 遺存状況が悪く、不確かさを伴うが、断面形は本来箱形またはフラスコ形を呈すると思われる。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[時期] 出土遺物がないため本遺構の詳細な時期は不明であるが、堆積土の様相から縄文時代前期後半またはそれ以降と考えられ、周辺で検出された竖穴住居跡、あるいは周辺で出土した遺物の時期に近いと推定される。(中村)

第9号土坑 (SK-9) [図13]

[堆積土] 30層に分層した。壁際には壁の基本層序第Ⅴ層と類似した土壌と、基本層序第Ⅲ層に類似した土層が互層となっており、自然堆積と思われる。[形状] 断面形はやや外傾する箱形である。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[時期] 出土遺物がないため本遺構の詳細な時期は不明であるが、堆積土の様相から縄文時代前期後半またはそれ以降と考えられ、周辺で検出された竖穴住居跡、あるいは周辺で出土した遺物の時期に近いと推定される。(中村)

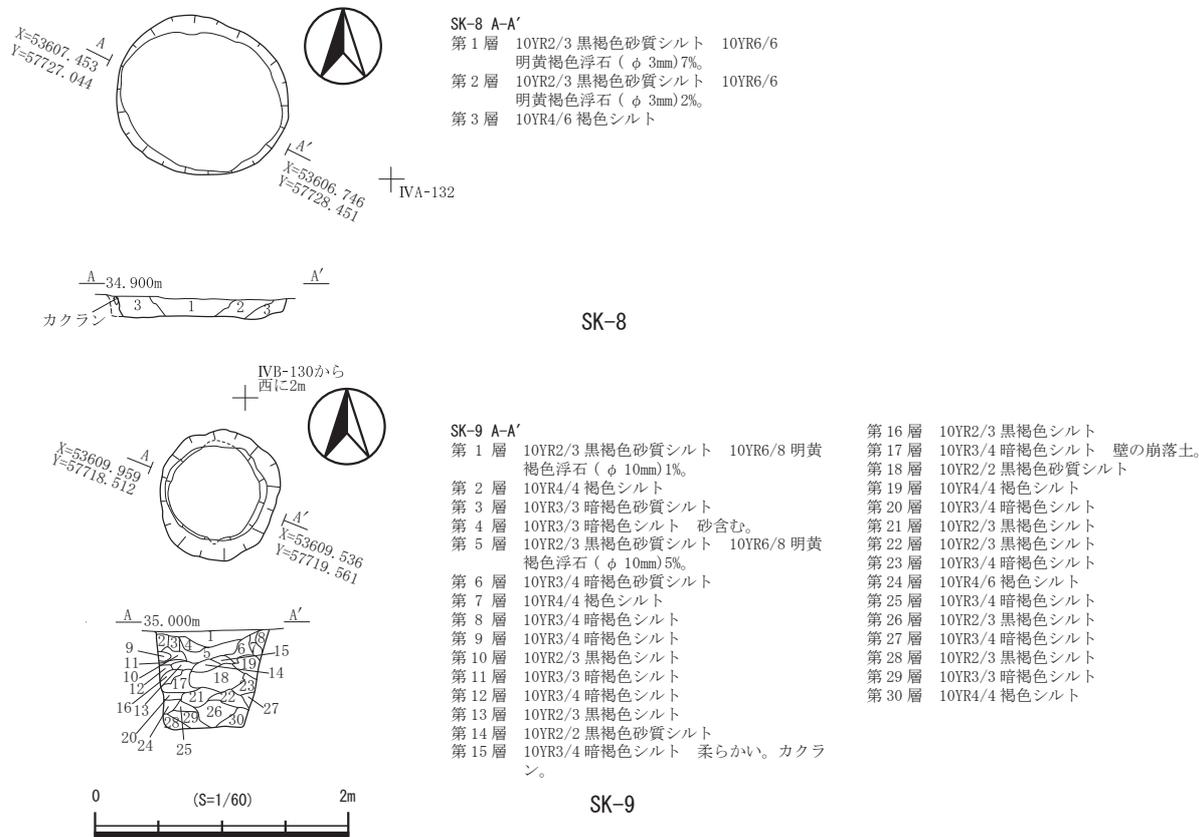


図13 第8号、第9号土坑

第10号土坑 (SK-10) [図14]

[堆積土] 7層に分層した。第4層までは砂質シルト、砂粒を微量含むシルトで、第Ⅲ層に類似する土質である。[形状] 断面形は箱形を呈する。[出土遺物] 縄文土器片が第1層から13片 (245.8g)、第2層から1片 (11.9g) 出土した。すべて縄文時代中期後葉の土器である。[時期] 出土した土器は最上層のものがほとんどで、本遺構の使用時期を直接に反映するものではないが、土器型式を超える時間差は想定しがたく、縄文時代中期後葉と考えられる。(中村)

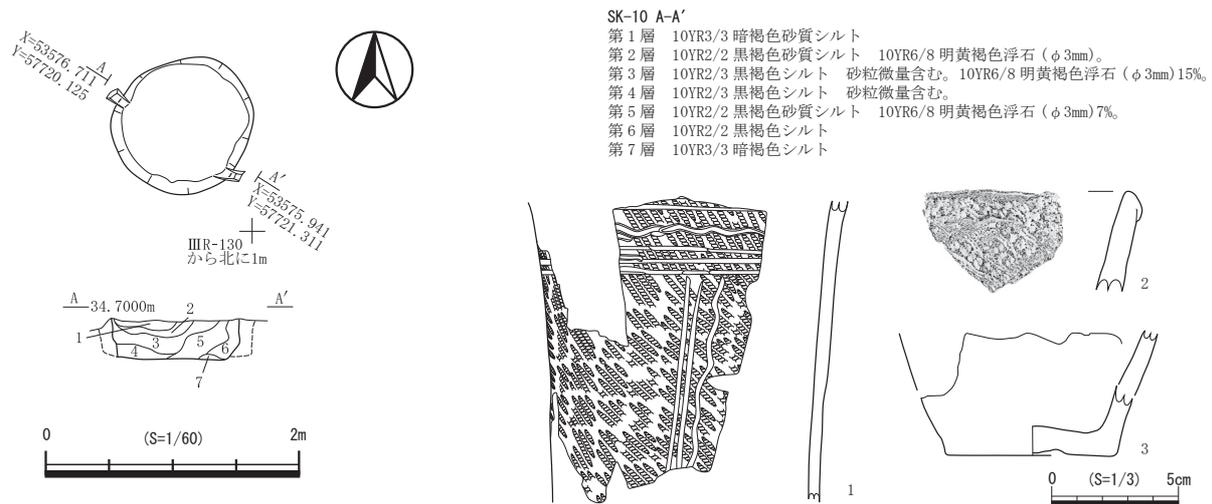


図14 第10号土坑

第11号土坑 (SK-11) [図15]

[堆積土] 5層に分層した。全体に5～10mmの黄褐色浮石を含む褐色～黒褐色のシルトで、基本層序第Ⅲ層下部～第Ⅳ層に類似する。[形状] 断面形はやや外傾気味の箱形を呈する。[出土遺物] 堆積土第1層から土器片が2片 (8.8g)、剥片が1点 (0.7g) 出土した。[時期] 本遺構に伴う出土遺物がないため本遺構の詳細な時期は不明であるが、堆積土の様相から縄文時代前期後半またはそれ以降と考えられ、周辺で検出された竪穴住居跡、あるいは周辺で出土した遺物の時期に近いと推定される。(中村)

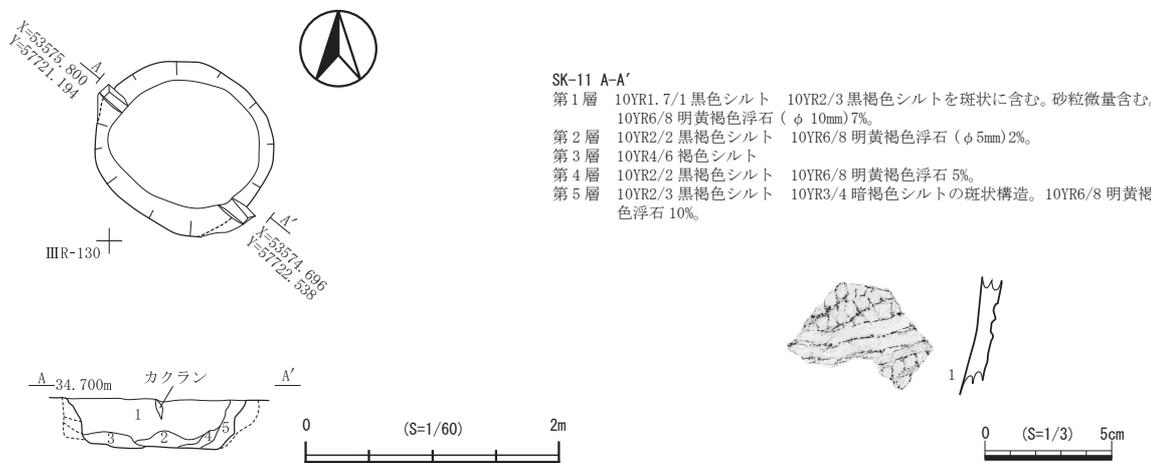
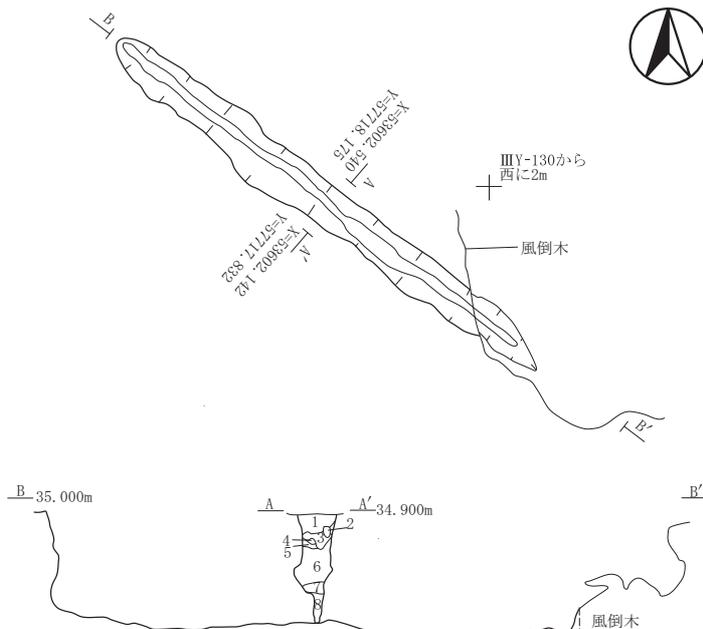


図15 第11号土坑

第2号溝状土坑 (SV-2) [図16]

[堆積土] 8層に分層した。火山灰土や浮石が認められる。その位置は、壁で見られるより低い位置にあることから壁を構成する火山灰土が崩落したものと解釈でき、自然堆積により埋没したものであると思われる。全体に砂粒の含有量は少ないが皆無ではない。十和田b浮石は含まない。[出土遺物]遺物は出土しなかった。[時期] 堆積土の様相から縄文時代前期後半～晩期のいずれかと思われる。(中村)



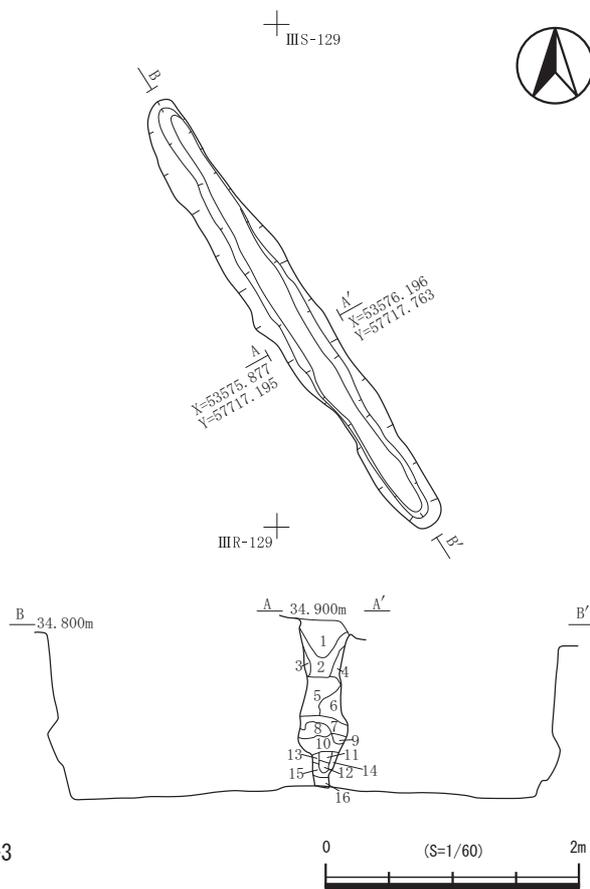
SV-2 A-A'

- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR4/4 褐色シルトの斑状構造。
- 第2層 カクラン
- 第3層 10YR2/3 黒褐色シルト
- 第4層 10YR2/2 黒褐色シルト
- 第5層 10YR4/4 褐色シルト 10YR2/3 黒褐色シルトを粒状に含む。第V層を主体とした崩落土。
- 第6層 10YR2/4 黒褐色シルト 10YR4/6 褐色シルトを塊状(φ10mm)に5%含む。
- 第7層 10YR5/8 黄褐色浮石と10YR2/3 黒褐色シルトの混合土 浮石は第VI a層の崩落土。
- 第8層 10YR2/2 黒褐色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色浮石20%。

SV-2

第3号溝状土坑 (SV-3) [図16]

[堆積土] 16層に分層した。粗粒砂を含む黒色～暗褐色のシルトと壁を構成する火山灰土に起源すると思われる土壌で構成される。火山灰土の位置は壁に見られる高さより低い位置にあり、崩落土と解釈され、自然堆積により埋没したものと考えられる。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[時期] 堆積土の様相から縄文時代前期後半～晩期のいずれかと思われる。(中村)



SV-3 A-A'

- 第1層 10YR1.7/1 黒色シルト
- 第2層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 10YR5/6 黄褐色浮石5%。
- 第3層 10YR2/2 黒褐色シルト 粗粒砂含む。IV層の崩落土。10YR5/6 黄褐色浮石10%。
- 第4層 10YR2/2 黒褐色シルト 粗粒含む。III層下部～IV層上部の崩落土。
- 第5層 10YR2/2 黒褐色シルト 上層よりやや明るい。粗粒砂含む。10YR5/6 黄褐色浮石5%。
- 第6層 10YR2/2 黒褐色シルト 粗粒砂微量含む。
- 第7層 10YR3/3 暗褐色シルト
- 第8層 10YR5/8 黄褐色シルト質火山灰土 第V層の崩落土。
- 第9層 10YR7/8 黄褐色浮石 第VI a層。
- 第10層 10YR1.7/1 黒色シルト
- 第11層 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR6/6 明黄褐色浮石(φ3mm)の混合土
- 第12層 10YR1.7/1 黒色シルトと10YR6/6 明黄褐色浮石(φ3mm)の混合土
- 第13層 10YR7/6 明黄褐色浮石(φ2mm) 第VI a層の崩落土。
- 第14層 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ2mm) 第VI a層の崩落土。
- 第15層 10YR6/8 明黄褐色浮石(φ2mm)と10YR2/2 黒褐色シルトの混合土 浮石は八戸火山灰VI層と思われる。
- 第16層 10YR1.7/1 黒色シルト

SV-3

図16 第2号、第3号溝状土坑

第4号溝状土坑 (SV-4) [図17]

[堆積土] 24層に分層した。粗粒砂を含む黒色～暗褐色のシルトと壁を構成する火山灰土に起源すると思われる土壌で構成される。火山灰土の位置は壁に見られる高さより低い位置にあり、崩落土と解釈され、自然堆積により埋没したものと考えられる。[出土遺物] 遺物は出土しなかった。[時期] 堆積土の様相から縄文時代前期後半～晩期のいずれかと思われる。(中村)

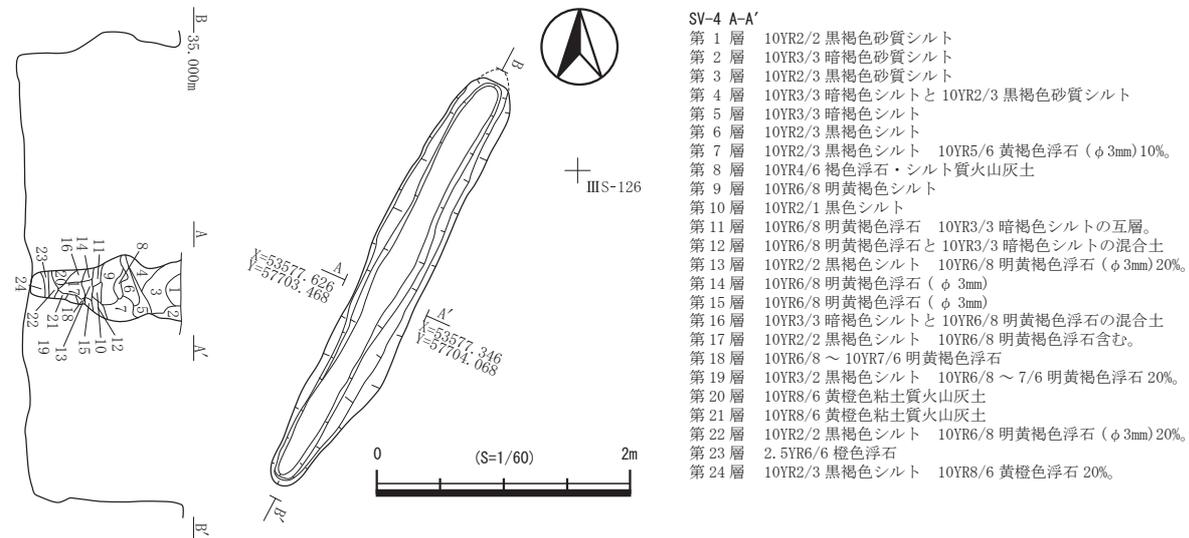


図17 第4号溝状土坑

第5号溝状土坑 (SV-5) [図18]

[堆積土] 16層に分層した。砂粒はあまり含まないが皆無ではない。黒色～黒褐色シルトと火山灰土からなる。火山灰土は壁に見られる位置より低いことから、崩落土と解釈される。従って自然堆積により埋没したものと考えられる。[出土遺物] 堆積土から縄文土器片が15片(191.9g)出土した。[時期] 堆積土の様相から縄文時代前期後半～晩期のいずれかと思われる。(中村)

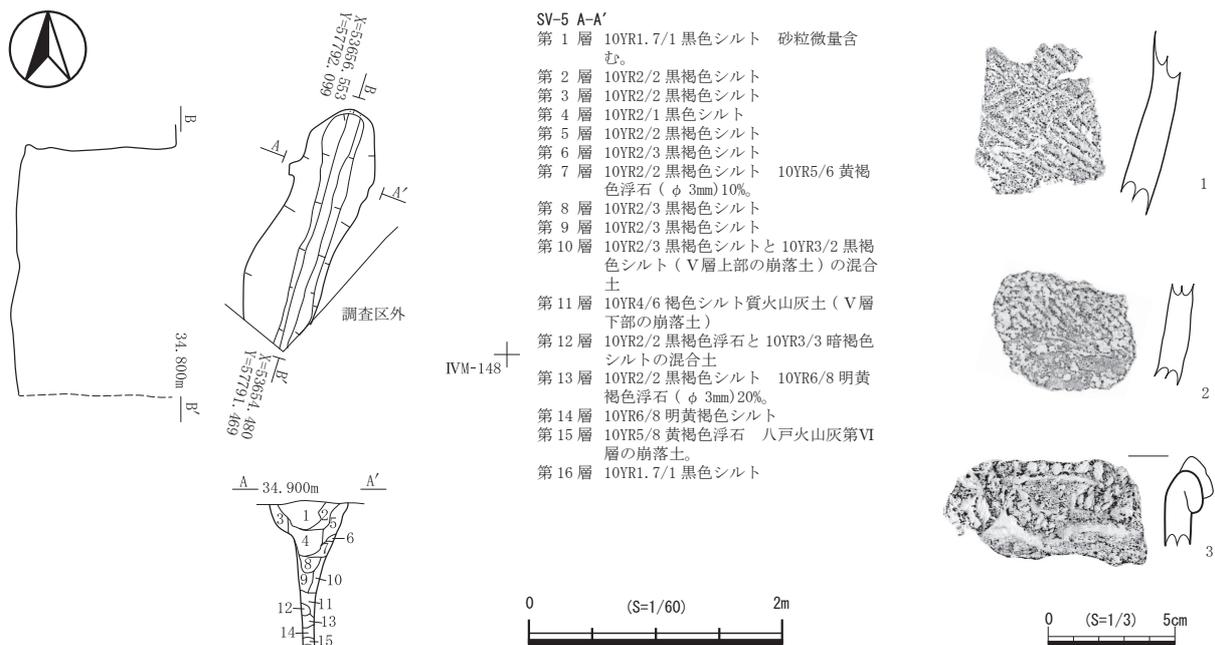


図18 第5号溝状土坑

第1号溝跡 (SD-1) [図19]

調査区南部のⅢI-124グリッドからⅢM-119グリッドにかけて、西北西-東南東方向に伸びる溝を検出した。第Ⅱ層を掘り込み、最終的には第Ⅰd層によって完全に埋積されている。深さは約50cmである。第Ⅰd層の形成時期は判然としないが、古代よりは新しいものと考えられる。(調査:澤田、記載:中村)

第2号溝跡 (SD-2) [図20]

調査区中央部のⅢU-131・132グリッドで検出された。基本層序第Ⅱ層を掘り込み、基本層序第Ⅰd層堆積前に埋没している。掘り込み面などから考えて、古代よりは新しいと思われる。(調査:澤田、記載:中村)

第3号溝跡 (SD-3) [図20]

調査区南部のⅢA-116・117グリッドで検出された。第Ⅱ層を掘り込み、最終的には第Ⅰ層によって完全に埋積されている。深さは約45cm、幅は上面で90cm弱である。底面は第Ⅲ層下部~第Ⅳ層である。第Ⅰ層の形成時期は判然としないが、古代よりは新しいものと考えられる。(中村)

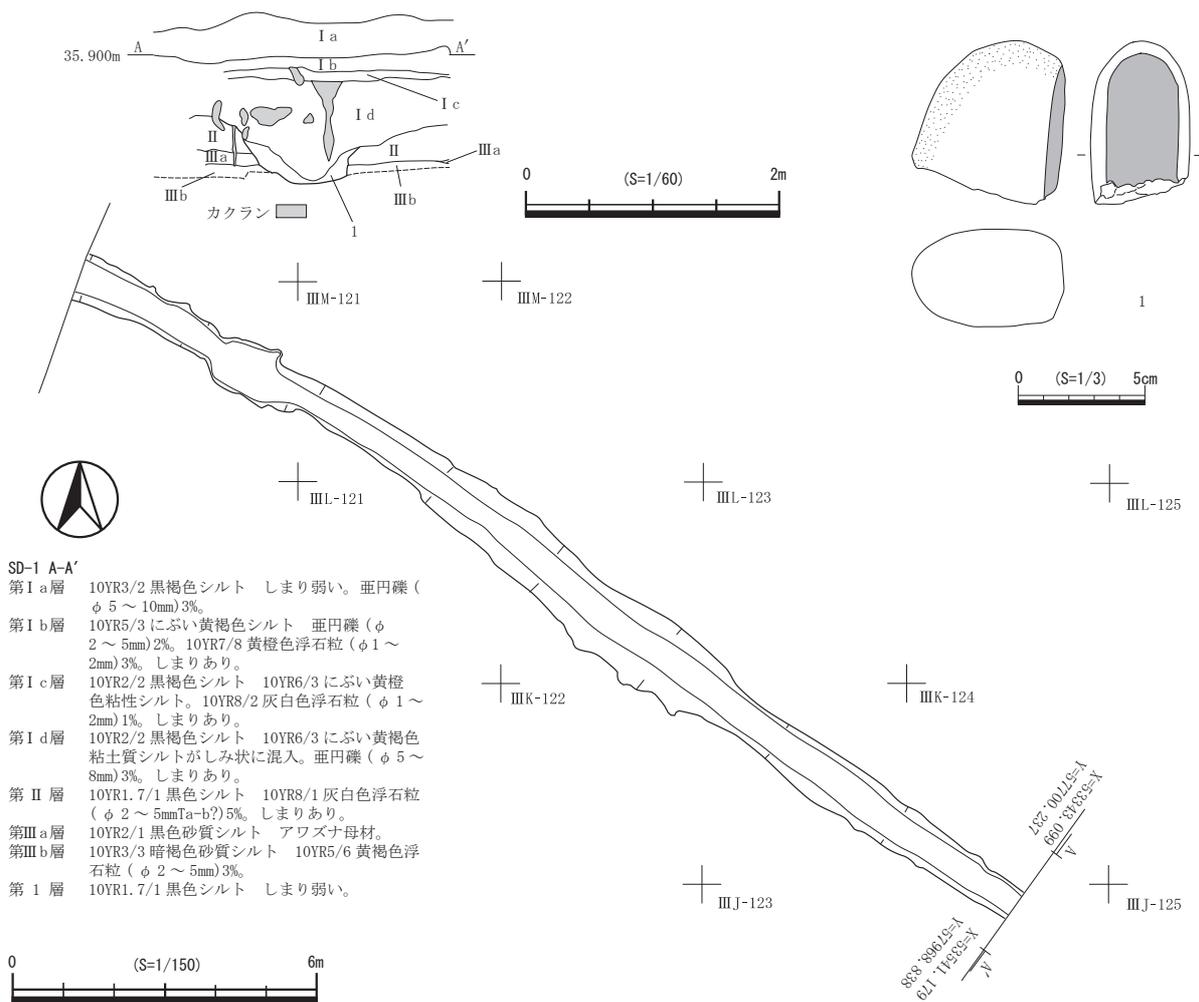
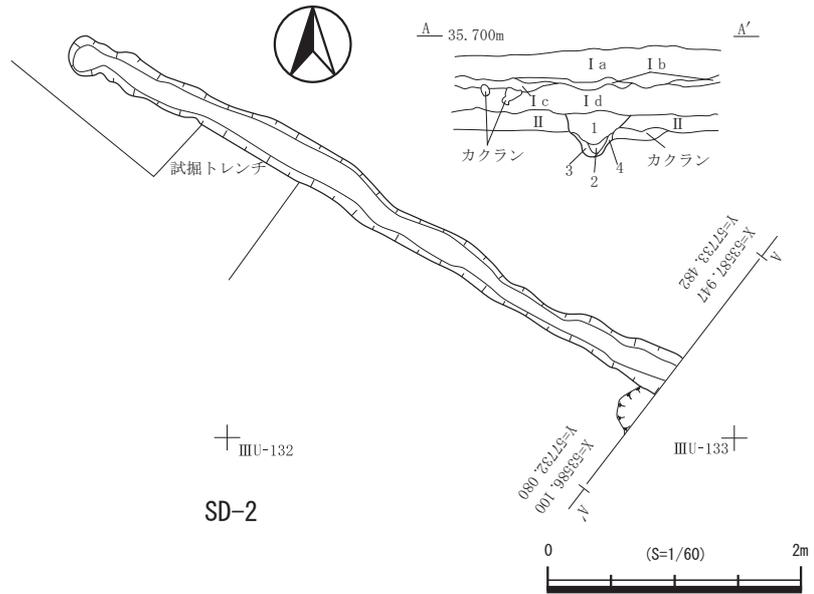


図19 第1号溝跡

SD-2 A-A'

- 第1 a層 10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR4/3 黄褐色シルトとの混合土 亜円礫 (φ 5~10mm) 3%。ビニール混じり。しまりあり。
- 第1 b層 10YR4/2 灰黄褐色シルト 亜円礫 (φ 3~5mm) 1%。10YR7/8 黄橙色浮石粒 (φ 1~2mm) 1%。しまり強い。
- 第1 c層 10YR2/2 黒褐色シルトと 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトとの混合土 亜円礫 (φ 2~5mm) 2%。10YR7/2 にぶい黄橙色浮石粒 (φ 1~2mm) 1%。
- 第1 d層 10YR2/2 黒褐色シルト 亜円礫 (φ 2~5mm) 2%。10YR6/3 にぶい黄橙色浮石 (φ 2~5mm) 2%。
- 第II層 10YR1.7/1 黒色シルト 10YR7/2 にぶい黄橙色浮石 (φ 2~5mm: To-b) 3%。
- 第1層 10YR2/1 黒色シルト
- 第2層 10YR2/1 黒色シルトと 10YR2/3 黒褐色砂質シルトの混合土
- 第3層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
- 第4層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 10YR6/8 明黄褐色浮石 (φ 2~5mm) 10%。



SD-3 A-A'

- 盛土1 10YR2/2 黒褐色シルト
- 盛土2 10YR2/2 黒褐色シルト 細礫 10%。
- 盛土3 10YR3/3 暗褐色シルト
- 第1層 10YR2/2 黒褐色シルト
- 第II層 10YR1.7/1 黒色砂質シルト 十和田b降下浮石含む。
- 第1層 10YR1.7/1 黒色砂質シルト

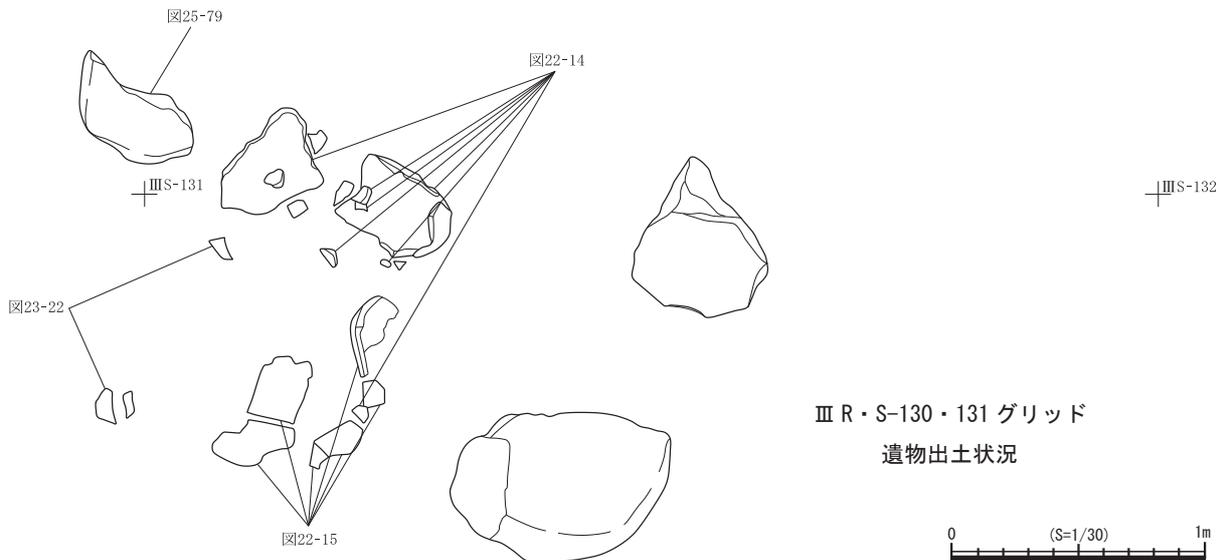
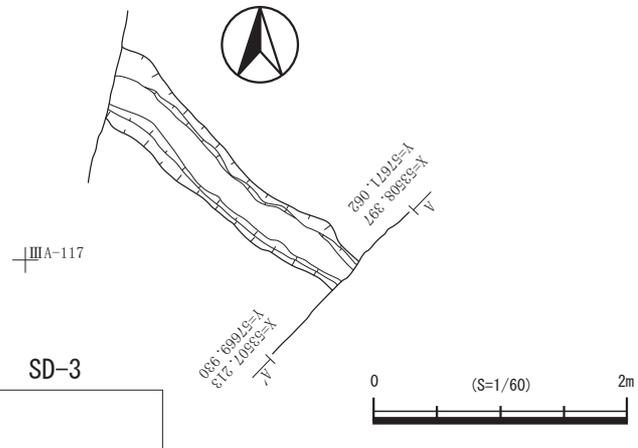
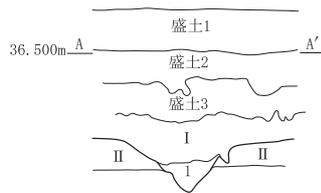


図20 第2号溝跡、第3号溝跡、III R · S-130 · 131 グリッド遺物出土状況

第3節 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文土器 897 片 (9174.3g)、陶磁器 25 片 (156.8g)、石器 21 点 (16772.6g)、鉄滓 1 点 (249.1g) が出土した。第Ⅲ層出土土器の出土傾向をグリッド単位で見ると (図 6)、第 10・11 号土坑付近に 1,000g 以上出土したグリッドがある。図 20 に示すように、復元個体が出土したことを反映している。それ以外は調査区の広い範囲にわたって少量ずつ出土している。第Ⅲ層の分布や包含層掘削時の精度の問題もあるので、第Ⅰ～第Ⅲ層すべての層の分布傾向を見ると、第 2 号・第 3 号竪穴住居跡付近にもやや多い傾向がある。時期別に見ると 1 区には後期前葉の土器が多い。それ以外は中期後葉～後期初頭の土器を主体に、前期末葉から中期初頭、中期中葉の土器が少量あり、明確な分布傾向は見い出せない。石器は量を確保するため第Ⅰ～第Ⅲ層すべての石器・剥片を対象としてグリッド単位で分布傾向を見ると、土器と同様、住居跡や土坑周辺にやや多い傾向がある。

(中村)

1 縄文土器

第Ⅰ群 (図 22-1～7)

縄文時代前期末葉～中期初頭の土器である。胎土には微量の繊維を含むものが多い。口縁部～胴部には結束第一種羽状縄文が横位回転で施される。7 は口縁部破片で、単軸絡条体側面圧痕により、縦位の短線文が施される。円筒上層 a 式である。

第Ⅱ群 (図 22-8)

縄文時代中期中葉の土器をあてた。8 は弁状突起上に、隆帯を網の目状に貼り付け、刺突文を施す。円筒上層 c 式である。

第Ⅲ群 (図 22-9～図 23-26)

縄文時代中期後葉～中期末葉の土器をあてた。9～12、14 は口唇部にヘラ刻みを施し、胴部には沈線により胸骨文が施される。11 は突起部に曲線的な隆帯が貼り付けられる。円筒上層 e 式に比定される。15～18 は縄文が施される胴部である。本群の胎土は第Ⅴ群とは異なり砂粒が目立たない。

第Ⅳ群 (図 23-27～37)

縄文時代後期初頭～前葉の土器である。27 は断面三角形の隆帯が施され、その下位には沈線が施される。28～32 は十腰内一式に比定される。

第Ⅴ群 (図 23-38～47)

縄文時代中期末葉～後期初頭のものと思われる、縄文のみが施される土器をあてた。41 をのぞいて胎土に 1～2mm 程度の石英が目立ち、第Ⅲ群とは区別される。44・47 は同一個体で、末端を結縛した原体を縦位回転施文している。

2 須恵器 (図 23-48・49)

2 片出土した。48 は底部片、49 は甕胴部片である。49 は断面がやや赤褐色を呈する。

3 陶磁器 (図 24-50～64)

1区、2区の第Ⅰ・Ⅱ層から出土した。産地は瀬戸、唐津、肥前系など、時期は16Cから近代までのものがある。(中村)

4 石器・石製品

A 剥片石器 (図24)

遺構外からは12点出土した。内訳は石鏃6点、石槍1点、削器1点、搔器1点、異形石器1点、微細剥離痕がある剥片1点、二次加工のある剥片が1点である。

石鏃 (図24-65～70) 平面形が二等辺三角形を基調とし、両面加工により尖端部を持つ。長さがおおむね5cm以内のものを石鏃とした。基部の形状と茎の有無によって、凹基無茎(1類)、平基無茎(2類)、突起有茎(3類)に分けられる。

石槍 (図24-71) 平面形が柳葉形で、両面加工が施される、長さがおおむね5cm以上のもの(推定長を含む)を石槍とした。

削器 (図24-72) 側縁部に刃部を有するものを削器とした。両面加工により右側縁に刃部が作出される。

搔器 (図24-73) 剥片の端部に急角度の剥離により刃部が形成されるもの。

微細剥離痕のある剥片 (図24-74) 剥片の鋭い側縁部に微細な剥離痕を有している。

異形石器 (図24-75) 両面加工により湾曲した棒状の器体が作出される。上端部は左右にやや突出する。

二次加工のある剥片 (図24-76) 厚みのある鉄石英の剥片に、背面側から剥離が施されている。

B 礫石器 (図25)

遺構外からは8点出土した。内訳は磨石3点(78・80・81)、石皿1点(79)、磨製石斧の未製品かと思われるもの1点(77)、砥石3点(82・84・85)である。77は折れた扁平な礫の正面の剥離部分に研磨が加えられている。磨製石斧の未製品の可能性を考えたが、他の用途を意図した可能性も考えられる。砥石の84・85は形状から古代の砥石と思われる。82は頁岩を利用した砥石で、出土層位から縄文時代のものと考えられる。

C 石製品 (図25-83)

石棒の破片が1点出土した。砂岩製である。側面は全面研磨により仕上げられている。

(中村・能代谷)

5 銭貨 (図25-86)

寛永通宝が1点出土した。新寛永である。背文はない。

6 鉄滓 (写真図版12)

ⅢQ・R-126・127グリッドの第Ⅰ層から椀形鉄滓が1点出土した。時期は不明である。付近では古代の遺物はほとんど出土しないが、4b区では古代の住居跡が検出されており、これと関連する可能性もある。(中村)

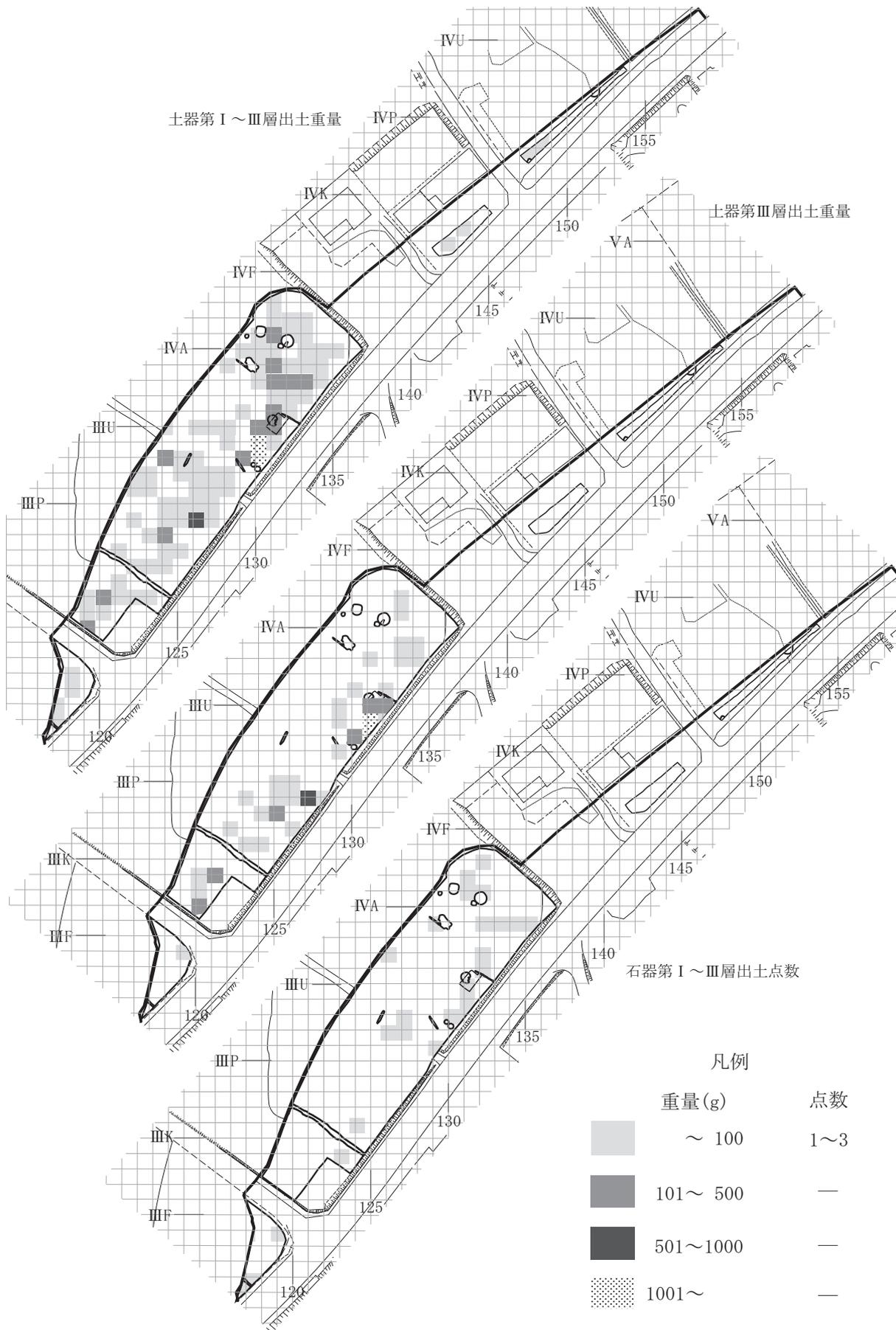


図 21 遺物出土量

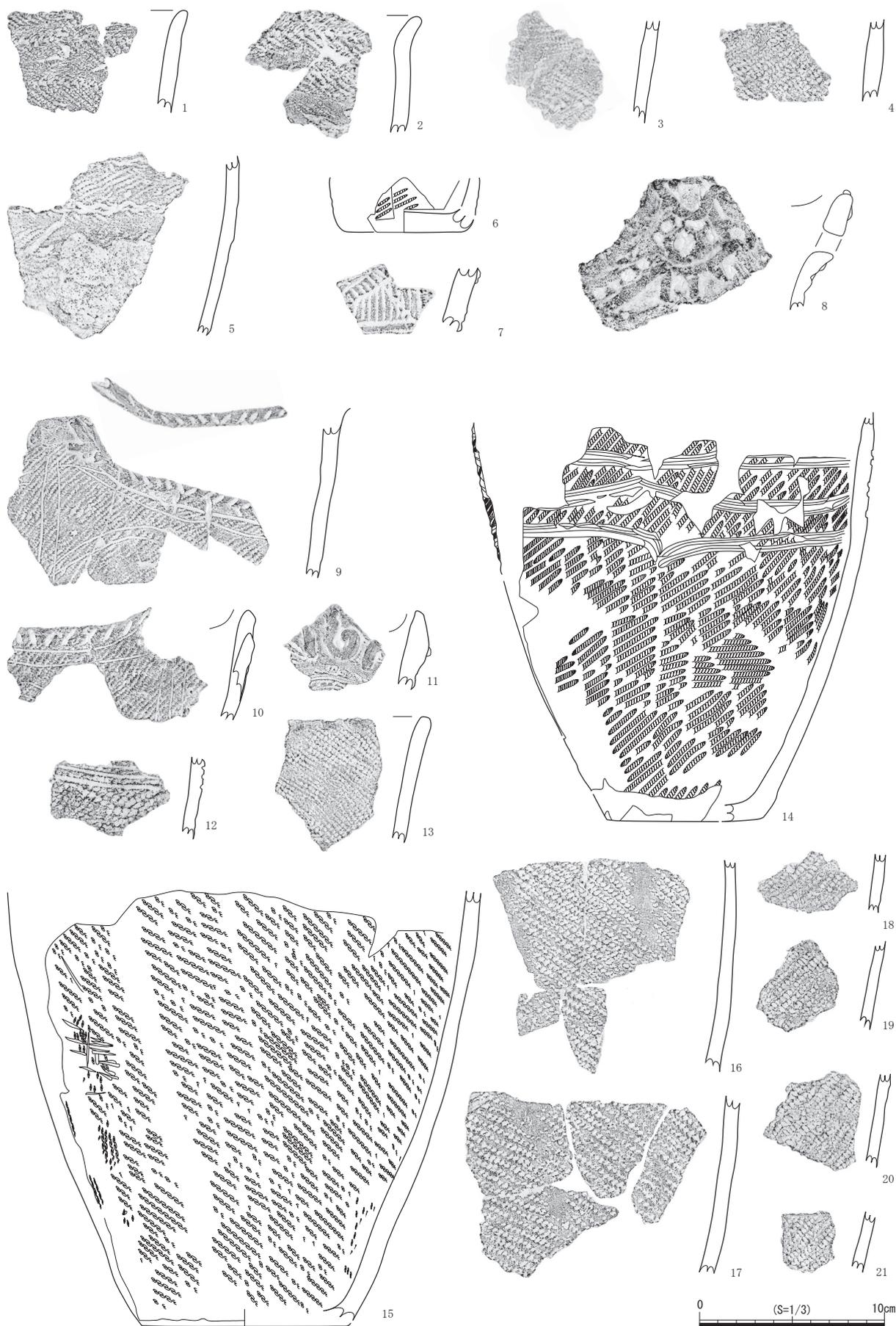


図22 遺構外出土土器(1)

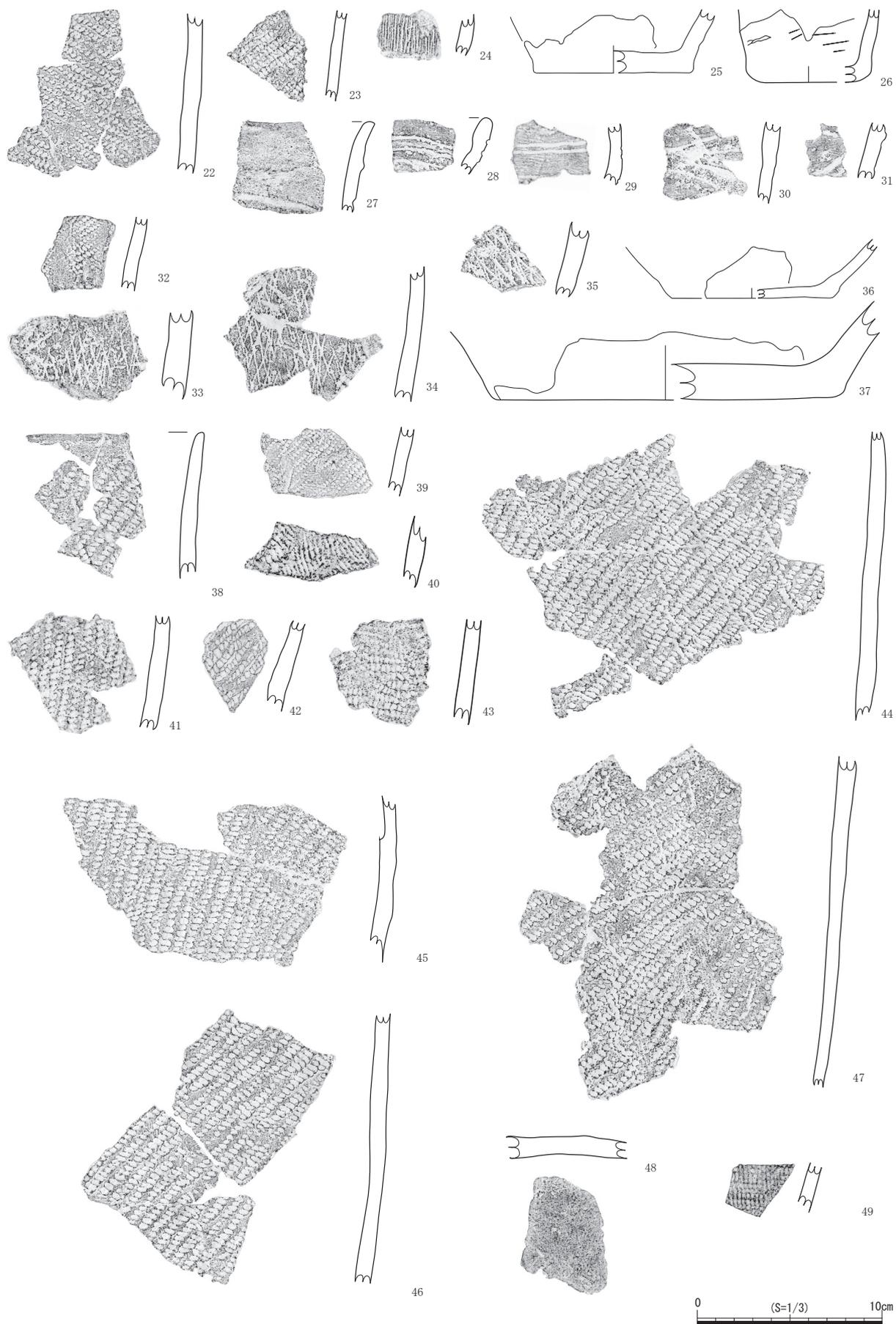


図 23 遺構外出土土器 (2)

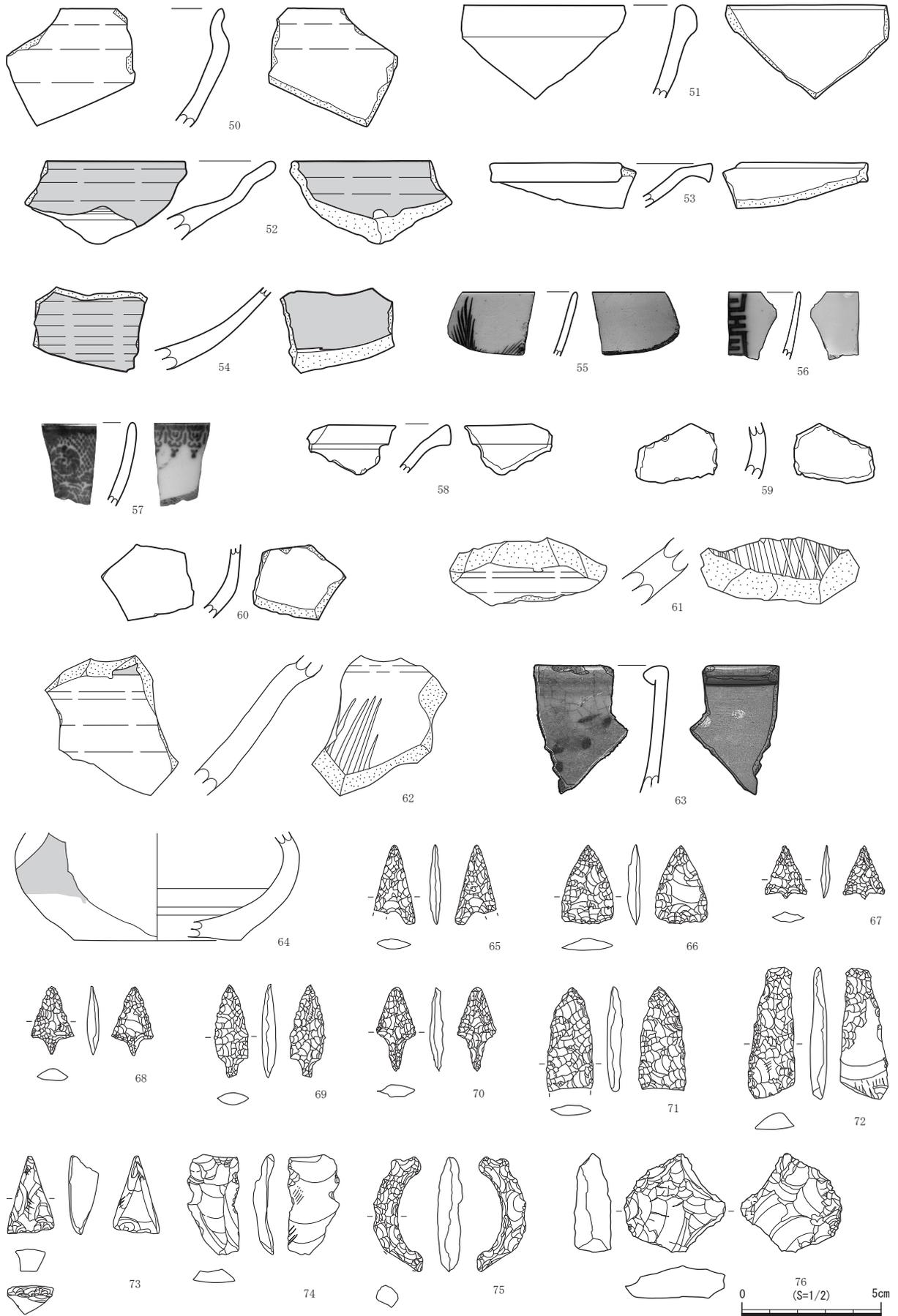


図24 遺構外出土陶磁器・石器 (1)

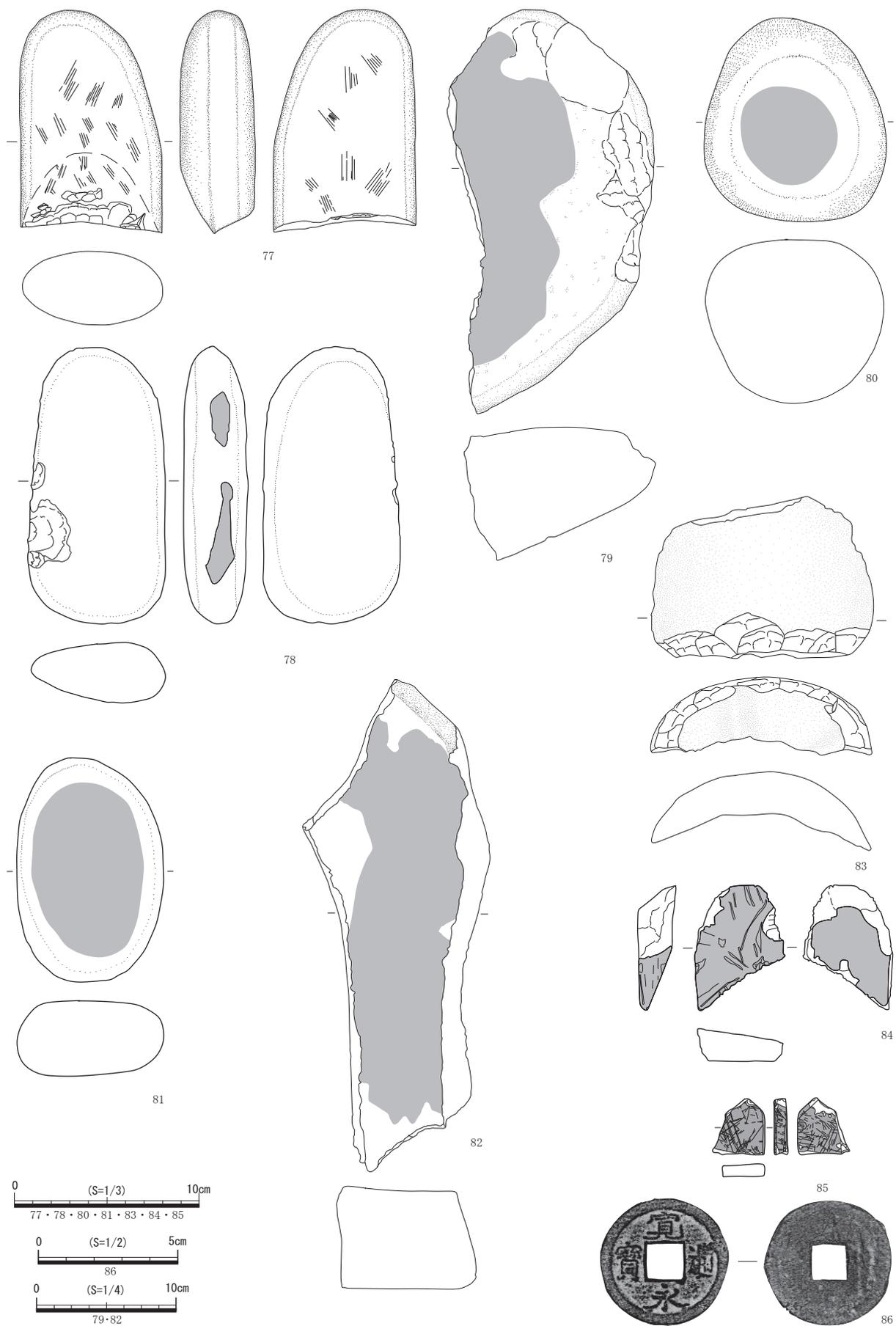


図 25 遺構外出土石器 (2)・銭貨

表4 土器観察表

図版番号	遺構名・グリッド	グリッド(修正後)	層位	取り上げ番号	種別	産地	器種	外面文様等	内面	胎土	分類
8-1	SI-1 炉		2	P-X	縄文土器			RL 横位回転→L 末端結束横位回転	ミガキ	繊維微量	I
9-1	SI-2		2	P-X	縄文土器			RLR 横位回転	ミガキ		III
9-2	SI-2		2	P-X	縄文土器			RLR 横位回転	ミガキ		III
10-1	SI-3		1	P-X	縄文土器			LR 横位～斜位回転	風化		IV
10-2	SI-3		1	P-X	縄文土器			LR 縦位回転	ナデ		IV
10-3	SI-3		1	P-X	縄文土器			LR 斜位回転	ナデ		IV
10-4	SI-3		1	P-X	縄文土器			RL 縦位回転	ナデ		IV
10-5	SI-3		1	P-X	縄文土器			LR 斜位回転	風化		IV
14-1	SK-10		1	P-X	縄文土器			LR 縦位回転→沈線。文様単位：3単位。垂下する沈線は2条の直線と1条の波線からなる。	ミガキ		III
14-2	SK-10		1	P-X	縄文土器			RLR 附加条(R) 横位回転	ミガキ		III
14-3	SK-10		1	P-X	縄文土器			LR 横位回転→沈線	ミガキ		III
15-1	SK-11		1	P-X	縄文土器			LR 横位回転	ミガキ		III
18-1	SV-5		覆土	P-X	縄文土器			結束第一種羽状縄文横位回転	ミガキ	繊維微量	I
18-2	SV-5		覆土	P-X	縄文土器			RL 横位回転	剥落		I
18-3	SV-5		覆土	P-X	縄文土器			口唇部：隆帯上に波状隆帯貼り付け。隆帯上にR側面圧痕	ミガキ		II
22-1	VI K-46	III I・J-120・121	III	P-X	縄文土器			結束第一種羽状縄文横位回転	風化	繊維微量	I
22-2	VI K-46	III I・J-120・121	III	P-X	縄文土器			結束第一種羽状縄文横位回転	風化	繊維微量	I
22-3	VI K-46	III I・J-120・121	III	P-X	縄文土器			結束第一種羽状縄文横位回転	風化	繊維微量	I
22-4	VI K-46	III I・J-120・121	III	P-X	縄文土器			結束第一種羽状縄文横位回転	風化	繊維微量	I
22-5	VI F-42	III D・E-116・117	I	P-X	縄文土器			LR 横位回転→L 末端結束回転文	ミガキ		I
22-6	VI W-57	III U・V-131・132	I	P-X	縄文土器			LR 横位回転	ナデ		I
22-7	VI Y-60	III W・X-134・135	カクラン	P-X	縄文土器			口縁部：隆帯による斜位区画。隆帯上に絡条体側面圧痕。区画内に絡条体側面圧痕による縦位短線	ミガキ		I
22-8	VI R-54	III P・Q-128・129	II	P-X	縄文土器			弁上突起上に、隆帯・角棒状工具による刺突	ミガキ		II
22-9	VI T-55	III R・S-129・130	III	P-X	縄文土器			突起上：隆帯貼り付け。口唇部：へら刻み。口縁部：LR 横位回転→沈線	ミガキ		III
	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X							
22-10	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X	縄文土器			口唇部：へら刻み。口縁部：LR 横位回転→沈線	ミガキ		III
22-11	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X	縄文土器			突起上：逆J字状隆帯貼り付け。口唇部：L側面圧痕による刻み	ナデ		III
22-12	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X	縄文土器			LR 縦位回転→断面片切状の鋭い沈線	ミガキ		III
22-13	VI D-42	III A・B-116・117	I	P-X	縄文土器			RLR 横位回転	ミガキ		III
22-14	VI T-56	III R・S-130・131	III	P-X	縄文土器						III
	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X							
22-15	VI T-56	III R・S-130・131	III	P-3,4,5,6,9,X	縄文土器			RL 縦位回転	ナデ		III
	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X							
22-16	VI T-56	III R・S-130・131	III	P-X	縄文土器			LRL 縦位回転	ミガキ		III
	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X							
22-17	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X	縄文土器			LRL 縦位回転	ミガキ		III
22-18	VI I-45	III G・H-119・120	III	P-X	縄文土器			LR 横位回転	ミガキ		III
22-19	VI I-45	III G・H-119・120	III	P-X	縄文土器			LR 横位回転	ミガキ		III
22-20	VI I-45	III G・H-119・120	III	P-X	縄文土器			LR 横位回転	ミガキ		III
22-21	VI I-45	III G・H-119・120	II	P-X	縄文土器			LR 横位回転	ミガキ		III
23-22	VI T-56	III R・S-130・131	III	P-X	縄文土器			LRL 縦位回転	ナデ		III
	VI U-57	III S・T-131・132	III								
	VI W-57	III U・V-131・132	I								
23-23	VI I-45	III G・H-119・120	III	P-X	縄文土器			LR 横位回転	ミガキ		III
23-24	VII B-57	III Y・IV A-131・132	I	P-X	縄文土器			櫛歯状工具による状線文			III

図版番号	遺構名・グリッド	グリッド (修正後)	層位	取り上げ 番号	種別	産地	器種	外面文様等	内面	胎土	分類
23-25	VI U-56	III S・T-130・131	III	P-X	縄文土器			底部直上：強いヘラナデ。	ミガキ		III
23-26	VI I-45	III G・H-119・120	III	P-X	縄文土器			LR斜位回転。	ナデ		III
23-27	VI Q-53	III O・P-127・128	III	P-X	縄文土器			断面三角形の隆帯・沈線。	ミガキ		IV
23-28	VII C-57	III A・B-131・132	I	P-X	縄文土器			緩い波状口縁。口縁部：口縁に平行する3条1組の沈線。	ナデ		IV
23-29	VI C-43	III A・B-117・118	I	P-X	縄文土器			平行沈線間にR斜位回転。	ミガキ		IV
23-30	VI Y-57	III W・X-131・132	I	P-X	縄文土器			沈線、沈線間に挟まれた隆帯による区画。	風化		IV
	VII A-57	III X・Y-131・132	I	P-X							
23-31	VII A-57	III X・Y-131・132	I	P-X	縄文土器			単軸絡条体5類縦位回転。			IV
23-32	VI C-42	III A・B-116・117	I	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	風化		IV
23-33	VII A-57	III X・Y-131・132	I	P-X	縄文土器			沈線、沈線間に挟まれた隆帯による区画。	ミガキ		IV
23-34	VI Y-57	III W・X-131・132	I	P-X	縄文土器			単軸絡条体5類縦位回転。	ミガキ		IV
	VI Y-58	III W・X-132・133	I	P-X							
	VII A-57	III X・Y-131・132	I	P-X							
23-35	VI Y-58	III W・X-132・133	I	P-X	縄文土器			単軸絡条体5類縦位回転。	ミガキ		IV
23-36	VI N-47	III L・M-121・122	III	P-X	縄文土器			胴部：ナデ。底面：板ナデ。	ミガキ		IV
23-37	VI Y-59	III W・X-133・134	I	P-X	縄文土器			ミガキ。	ミガキ		IV
23-38	VI P-52	III N・O-126・127	II・III	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	風化		V
23-39	VI I-45	III G・H-119・120	III	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	ミガキ		V
23-40	VI R-52	III P・Q-126・127	I	P-X	縄文土器			LR斜位～縦位回転。	ミガキ		V
23-41	VI O-49	III M・N-123・124	カクラン	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	風化		V
	VI P-52	III N・O-126・127	III	P-X							
23-42	VI M-50	III K・L-124・125	III	P-X	縄文土器			LR横位回転。	剥落		V
23-43	VI F-44	III D・E-118・119	III	P-X	縄文土器			LR斜位回転。	ナデ		V
23-44	VI P-52	III N・O-126・127	II	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	風化		V
23-45	VI P-52	III N・O-126・127	III	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	風化		V
23-46	VI P-52	III N・O-126・127	II・III	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	風化		V
23-47	VI N-50	III L・M-124・125	カクラン	P-X	縄文土器			RL縦位回転。	風化		V
	VI O-50	III M・N-124・125	III	P-X							
23-48	VI Q-50	III O・P-124・125	III	P-X	須恵器		甕				
23-49	VI T-51	III R・S-125・126	I	P-X	須恵器		甕				

表5 陶磁器観察表

図版番号	遺構名・グリッド	グリッド (修正後)	層位	取り上げ 番号	種別	産地	器種	特徴	年代
24-50	VII C-57	IV A・B-131・132	I	P-X	陶磁器	瀬戸美濃	天目茶碗		
24-51	VI S-51	III Q・R-125・126	I	P-X	陶磁器			内外面鉄釉。	
24-52	VI T-57	III R・S-131・132	I	P-X	陶磁器	唐津	皿	胴下部無釉。砂目。	16C後半以降
24-53	VI Y-57	III W・X-131・132	I	P-X	陶磁器	瀬戸	皿		
24-54	VII B-60	III Y・IV A-134・135	カクラン	P-X	陶磁器	肥前	碗		
24-55	VII A-54	III X・Y-128・129	I	P-X	陶磁器	肥前	碗		明治～
24-56	VI Q-50	III O・P-124・125	I	P-X	陶磁器	瀬戸	染付碗		
24-57	VI T-50	III R・S-124・125	I	P-X	陶磁器	肥前	碗		
24-58	VII C-57	IV A・B-131・132	I	P-X	陶磁器		皿	内外面印判染付。	19C
24-59	VII D-57	III A・B-131・132	I	P-X	陶磁器		-		
24-60	VI P-51	III N・O-125・126	II	P-X	陶磁器	瀬戸	-		近世
24-61	VI K-47	III J・I-121・122	I	P-X	陶磁器		播鉢	内外面鉄釉。	
24-62	VI P-52	III N・O-126・127	I	P-X	陶磁器		播鉢		
24-63	VI T-50	III R・S-124・125	I	P-X	陶磁器		香炉	外面：灰色釉下に染付。 内面：口唇部のみ施釉。	
24-64	VI Y-56	III W・X-130・131	I	P-X	陶磁器		壺？	内外面鉄釉。底部無釉。胎土灰色。	

表6 石器観察表

図版 番号	遺構名・ グリッド	グリッド (修正後)	層位	取り上げ 番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	器種	分類	石質
8-2	SI-1		2	S-X	9.6	9.2	4.9	727.7	敲磨器		安山岩
9-3	SI-2		1	S-X	(9.2)	(8.3)	(2.6)	181.3	敲石		閃緑岩
11-1	SI-3		2	S-X	12.0	10.9	8.1	1540.2	敲石		安山岩
11-2	SI-3		2	S-X	9.8	9.8	7.8	1091.9	磨石		安山岩
19-1	SD-1		覆土	S-X	(6.6)	(6.1)	(4.0)	235.0	磨石		閃緑岩
24-65	VI Q-50	III O・P-124・125	III	S-X	2.9	(1.5)	0.4	1.0	石鏃	1	珪質頁岩
24-66	VI B-42	II Y・III A-116・117	II	S-X	2.9	1.9	0.5	2.2	石鏃	2	珪質頁岩
24-67	VI M-49	III K・L-123・124	II	S-X	2.0	1.5	0.3	0.6	石鏃	3	珪質頁岩
24-68	VII A-59	III X・Y-133・134	I	S-X	2.5	1.5	0.4	0.9	石鏃	3	玉髓質珪質頁岩
24-69	VI K-48	III I・J-122・123	II	S-X	3.4	1.2	0.5	1.8	石鏃	3	珪質頁岩
24-70	VI C-42	III A・B-116・117	II	S-X	3.0	1.3	0.5	1.1	石鏃	3	珪質頁岩
24-71	VII A-60	III X・Y-134・135	I	S-X	(3.8)	1.7	0.5	3.5	石槍		珪質頁岩
24-72	VI S-52	III Q・R-126・127	I	S-X	4.8	1.7	0.6	5.1	削器		珪質頁岩
24-73	VI S-51	III Q・R-125・126	I	S-X	2.9	1.7	1.1	2.8	搔器		珪質頁岩
24-74	VII D-56	III A・B-130・131	I	S-X	3.7	1.9	0.8	3.0	微細剥離痕のある剥片		珪質頁岩
24-75	VI X-51	III V・W-125・126	カクレン	S-X	4.2	1.8	0.9	3.4	異形石器		珪質頁岩
24-76	VI W-57	III U・V-131・132	I	S-X	3.7	3.7	1.4	15.7	二次加工のある剥片		鉄石英
25-77	VII A-54	III X・Y-128・129	風倒木痕	S-X	12.1	7.6	4.0	592.3	磨製石斧未製品?		粗粒玄武岩
25-78	VI F-44	III D・E-118・119	III	S-X	15.3	7.5	3.5	590.6	磨石		砂岩
25-79	VI T-56	III R・S-130・131	III	S-5	(29.6)	(15.2)	(10.0)	4940.0	石皿		安山岩
25-80	VII C-56	IV A・B-130・131	I	S-X	11.3	9.9	9.1	1478.3	磨石		安山岩
25-81	VI U-56	III S・T-130・131	III	S-X	12.2	8.1	4.2	726.4	磨石		安山岩
25-82	VI V-56	III T・U-130・131	III	S-X	34.3	13.1	7.1	4240.0	砥石		頁岩
25-83	VI T-55	III R・S-129・130	III	S-X	(8.8)	(12.0)	(4.2)	322.3	石棒		砂岩
25-84	VI X-57	III V・W-131・132	ナシ	S-X	6.9	4.9	11.0	52.0	砥石		流紋岩
25-85	-	-	表採	S-X	(3.1)	(2.9)	(0.8)	8.6	砥石		頁岩

表7 銭貨観察表

図版 番号	遺構名・ グリッド	グリッド (修正後)	層位	取り上げ 番号	銭名	外径	内径	備考
25-86	-	-		-	寛永通宝			

表8 鉄滓観察表

図版 番号	遺構名・ グリッド	グリッド (修正後)	層位	取り上げ 番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
写12	VI S-52	III Q・R-126・127	I	X	8.0	10.5	3.0	249.1	

第4章 理化学的分析

第1節 松ヶ崎遺跡より出土した炭化材

吉川純子（古代の森研究舎）

1. はじめに

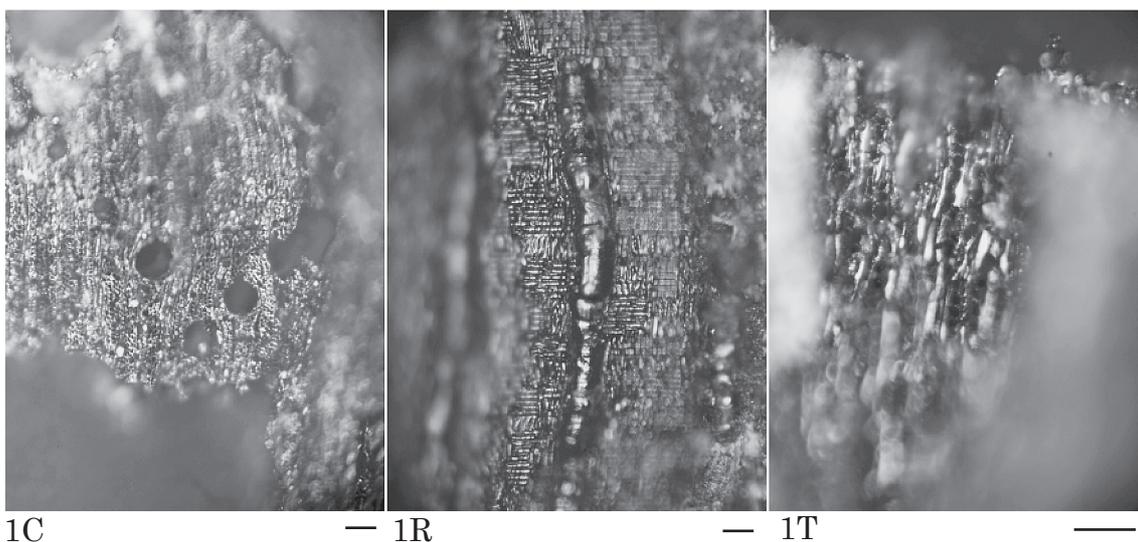
松ヶ崎遺跡は八戸市の南東部新井田川と松館川に挟まれた段丘上に位置する、縄文時代中期の集落跡である。本遺跡の縄文時代中期前葉～中葉のものと思われる竪穴住居 SI-2 の床面から炭化材が1点だけ検出されたことから、樹種同定を行った。試料からは剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の断面を割り、反射照明型顕微鏡で観察同定した。

2. 同定結果及び考察

炭化材 C-X はクリと同定された、以下に木材構造の記載を行う。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪最初にやや大きな道管が数個並んで、径を減じつつ薄壁の道管が径を減じながら火炎状に並ぶ環孔材。道管の穿孔板は単一で、放射組織は1列ないし2列で同性であった。

炭化材は SI-2 住居の床面より出土ということ以外の詳細は不明であるが、炭化材の出土は1点のみであったということから、焼失住居の可能性は低く、燃料材の残りではないかと考えられる。クリは青森県をはじめとする東北地域において、特に縄文時代の建築材としての出土例が大変多く、建築材以外でも高い頻度で利用されていた可能性がある。



1.クリ C:横断面,R:放射断面,T:接線断面,スケールは0.1mm

図 26 松ヶ崎遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

第2節 松ヶ崎遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

松ヶ崎遺跡は、青森県八戸市大字十日市字風浚地内（北緯 40° 28′ 50″、東経 141° 30′ 51″）に所在する。測定対象試料は、SI-2 床面出土木炭（09mtgsk_1：IAAA-92238）1点である。

2 測定の意義

遺構の年代を推定する。

3 化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除き、必要量の試料を採取、秤量する（表 11「処理前試料量」）。

（2）酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、遠心分離機を使用して超純水で中性になるまで希釈する。希釈後の試料を 90℃で乾燥し、秤量する（表 11「処理後試料量」）。

（3）必要量を採取、秤量（表 11「燃焼量」）した試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。

（4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（表 11「精製炭素量」）。

（5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを精製する。

（6）グラファイトを内径 1 mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

（1）年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。

（2）¹⁴C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

(4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al. 2004)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 1995; Bronk Ramsey 2001; Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

表 9

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-92238	09mtgsk_1	遺構: SI-2 層位: 床面 注記: 炭化材	木炭	AAA	-24.94 ± 0.2	4,470 ± 20	57.34 ± 0.15

[#3355]

表 10

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-92238	4,470 ± 20	57.34 ± 0.15	4,468 ± 20	3324BC - 3234BC (50.2%) 3173BC - 3161BC (5.3%) 3118BC - 3093BC (12.7%)	3331BC - 3214BC (59.1%) 3188BC - 3155BC (10.7%) 3131BC - 3086BC (17.9%) 3062BC - 3029BC (7.7%)

[参考値]

表 11

試料名	測定機番	前処理方法	処理前試料量 (mg)	処理後試料量 (mg)	燃焼量 (mg)	精製炭素量 (mg)	測定回数	^{14}C カウント数	$^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比 (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	Libby Age (yrBP)	(yrBP・丸め込みなし)	暦年較正年代 (1 σ 暦年代範囲)	暦年較正年代 (2 σ 暦年代範囲)
09mtgsk_1	IAAA-92238	AAA	55.28	12.15	4.77	3.01	13	174705	1.1002	-24.94 ± 0.20	4,470 ± 20	4,468 ± 20	3324BC - 3234BC (50.2%) 3173BC - 3161BC (5.3%) 3118BC - 3093BC (12.7%)	3331BC - 3214BC (59.1%) 3188BC - 3155BC (10.7%) 3131BC - 3086BC (17.9%) 3062BC - 3029BC (7.7%)

6 測定結果

SI-2 床面出土木炭 09mtgsk_1 の ^{14}C 年代は $4470 \pm 20\text{yrBP}$ である。縄文時代中期前半頃に相当する。炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46(3), 1029-1058

[参考] 暦年較正年代グラフ

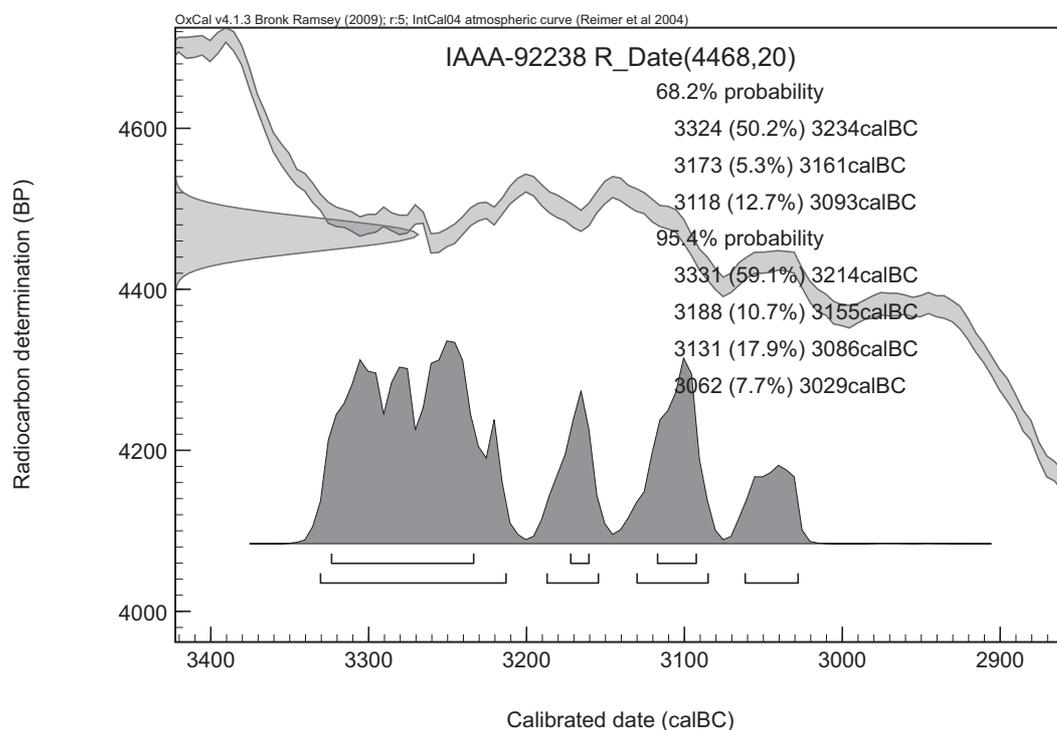


図 27 暦年較正グラフ

第5章 まとめ

平成 21 年度の調査では遺跡の東部の調査を行った。その結果、縄文時代の竪穴住居跡 4 軒、土坑 4 基、溝状土坑 4 基、平安時代の竪穴住居跡 1 軒を検出した。

縄文時代の竪穴住居跡は 3 軒の精査を行った。その結果、2 軒が中期前葉～中葉、1 軒が縄文時代中期末葉の竪穴住居跡であることが判明した。中期前葉～中葉の竪穴住居跡は土器埋設炉を持つものと炉を持たないものがある。いずれも柱穴は検出されなかった。中期末葉の竪穴住居跡は、複式炉系列の炉を持つ。

土坑は小規模なもので、深さ、径とも 1 m 程度、もしくはそれ以下である。

溝状土坑は堆積土の様相から縄文時代と考えられるが、集落が形成されない時期のものと思われる。

平安時代の竪穴住居跡の存在は遺跡内でも北寄りに平安時代の集落が営まれたことを示している。

出土した遺物は縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、石製品、鉄滓、銭貨があるが、主体をしめるのは縄文時代の土器石器である。陶磁器がこれに次ぎ、そのほかは 1～数点である。縄文土器の時期は中期後葉、後期初頭～前葉の土器を中心に前期末葉～後期前葉までの土器が断続的にある。土器・石器は遺構周辺で多く出土する傾向がある。

総じて、縄文時代の集落に関わる遺構・遺物の密度は低い。遺跡中央部の状況は八戸市教育委員会の調査によって明らかにされており、中期中葉の住居跡が多数重複する。平成 21 年度調査区の状況は、これとは異なり、遺跡東側の周縁部であると考えられる。(中村・能代谷)

本書で用いた引用・参考文献 (順不同)

- | | | |
|----------|------|--|
| 江坂 輝彌 | 1956 | 「十日市貝塚群出土の鳥獣魚骨から見た縄文文化の食糧資源」『奥南史苑』 1 |
| 音喜多富寿 | 1972 | 『八戸市松ヶ崎遺跡調査報告書』(ガリ版刷り) |
| 滝沢 幸長 | 1967 | 『八戸市大字十日市松ヶ崎貝塚』 |
| 松山 力 | 1983 | 『八戸の地質』八戸市教育委員会 |
| 青森県教育委員会 | 2001 | 『松ヶ崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 291 集 |
| | 2004 | 『松ヶ崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 377 集 |
| | 2009 | 『青森県遺跡地図』 |
| | 2010 | 『笹子(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 480 集 |
| 八戸市教育委員会 | 1994 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 6』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 60 集 |
| | 1995 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 7』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 61 集 |
| | 1996 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 8』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 65 集 |
| | 1999 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 11』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 77 集 |
| | 1999 | 『西長根遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 80 集 |
| | 2000 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 12』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 83 集 |
| | 2001 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 13』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 87 集 |
| | 2002 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 14』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 90 集 |
| | 2004 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 18』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 102 集 |
| | 2008 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 25』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 117 集 |
| | 2010 | 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 27』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 124 集 |



2区北半空中写真



4区空中写真

写真図版 1



基本層序

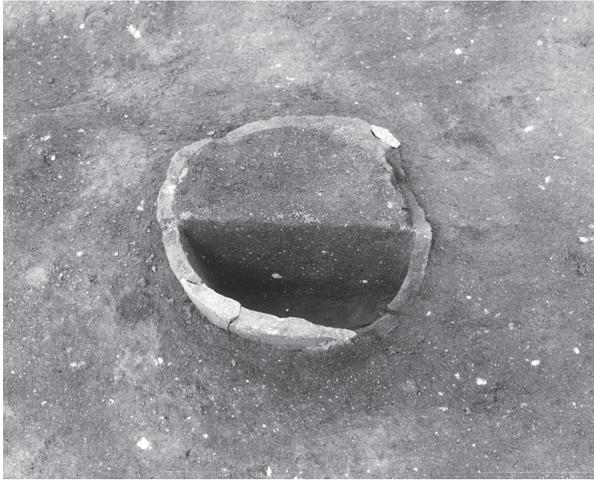


Ⅲ R・S-130・131 遺物出土状況 北から



第1号竪穴住居跡土層堆積状況 南東から

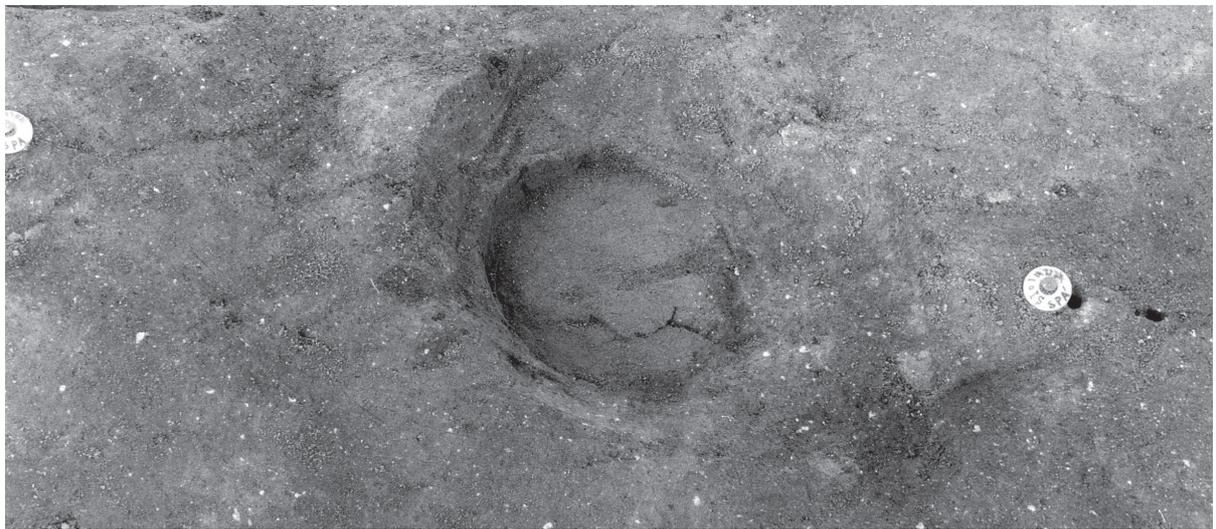
写真図版2



第1号竖穴住居跡炉土器内土層堆積状況 南西から



第1号竖穴住居跡炉掘方土層堆積状況 南西から

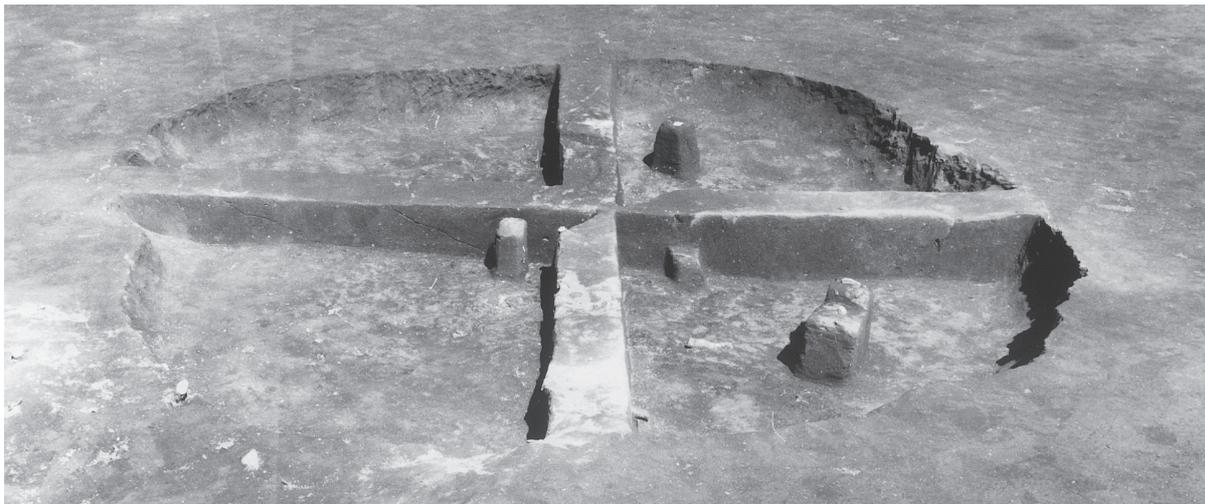


第1号竖穴住居跡炉完掘状況 南西から



第1号竖穴住居跡完掘状況 南東から

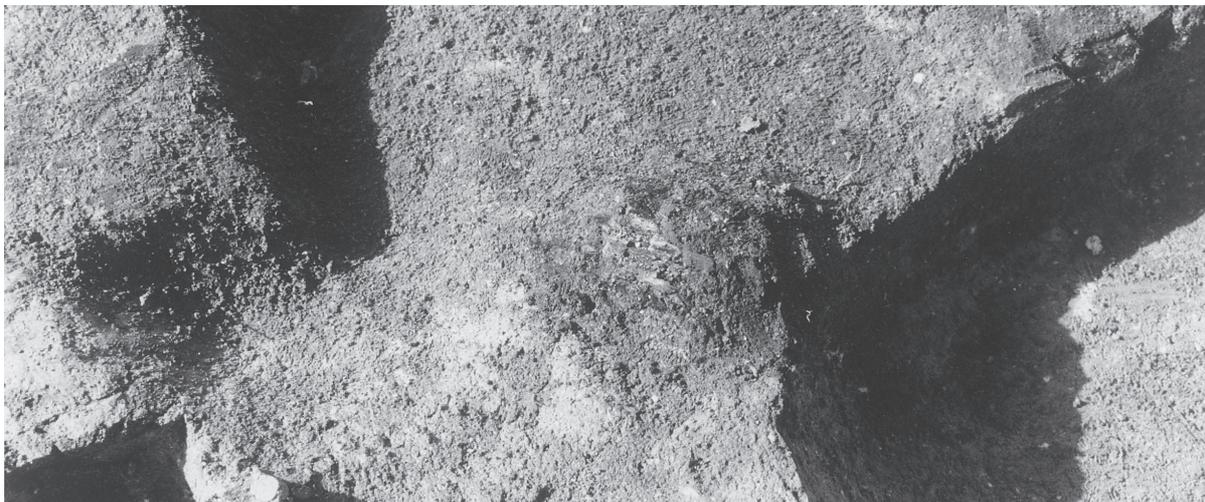
写真図版 3



第2号竖穴住居跡土層堆積状況 南から



第2号竖穴住居跡完掘状況 東から



第2号住居跡床面炭化材出土状況

写真図版 4



第3号竪穴住居跡土層堆積状況 南から



第3号竪穴住居跡 pit1 土層堆積状況 東から



第3号竪穴住居跡炉前庭部堆積状況 西から



第3号竪穴住居跡完掘状況 南から

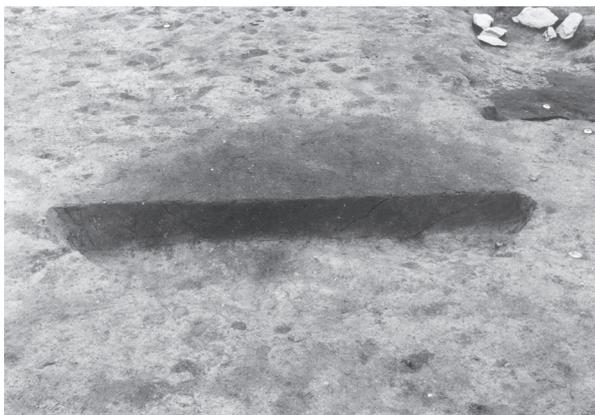
写真図版 5



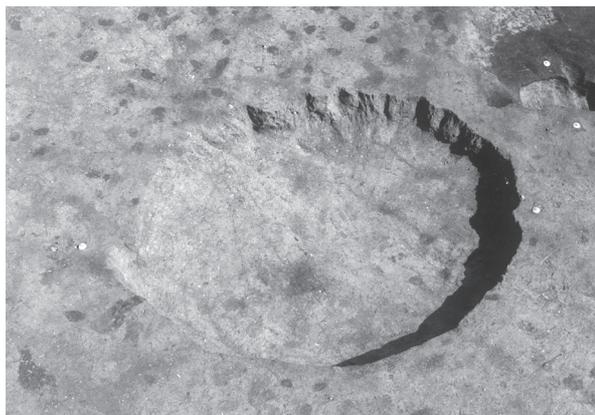
第4号竖穴住居跡完掘状況 北西から



第4号竖穴住居跡床面截割状況 北西から



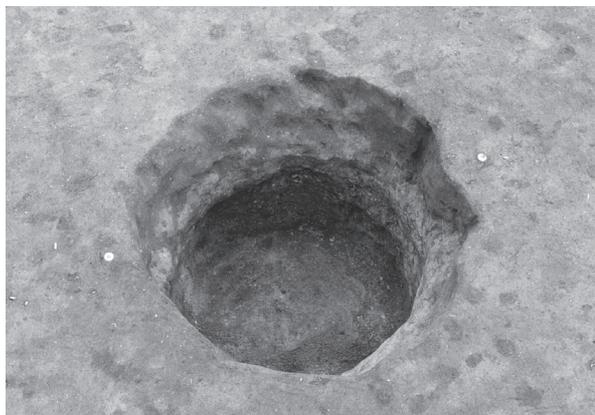
第8号土坑土層堆積状況 南西から



第8号土坑完掘堆積状況 南西から



第9号土坑土層堆積状況 南西から



第9号土坑完掘状況 南西から



第10号土坑土層堆積状況 南西から



第11号土坑土層堆積状況 南西から

写真図版6



第2号溝状土坑土層堆積状況 北西から



第3号溝状土坑土層堆積状況 南東から



第4号溝状土坑土層堆積状況 南西から



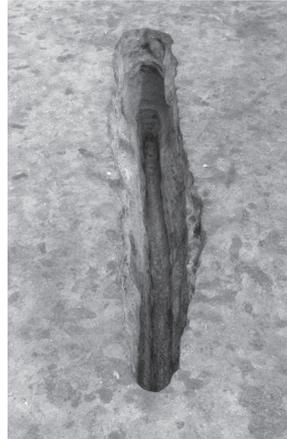
第5号溝状土坑土層堆積状況 南西から



第2号溝状土坑完掘状況 北西から



第3号溝状土坑完掘状況 南東から



第4号溝状土坑完掘状況 南西から



第5号溝状土坑完掘状況 南西から



第1号溝跡完掘状況 南東から



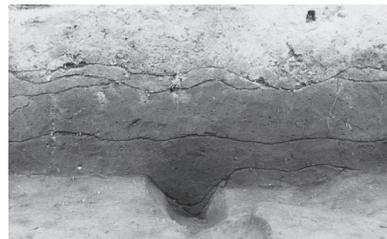
第2号溝跡完掘状況 南東から



第3号溝跡完掘状況 南東から



第1号溝跡土層堆積状況 北西から



第2号溝跡土層堆積状況 北西から



第3号溝跡土層堆積状況 北西から

写真図版 7

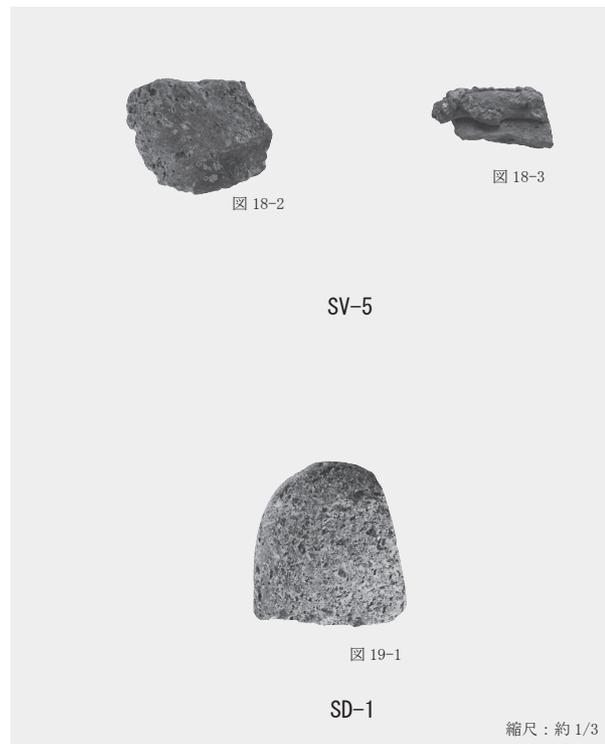
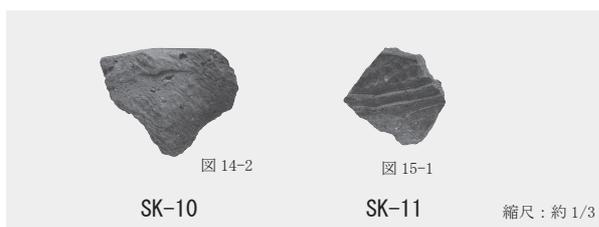
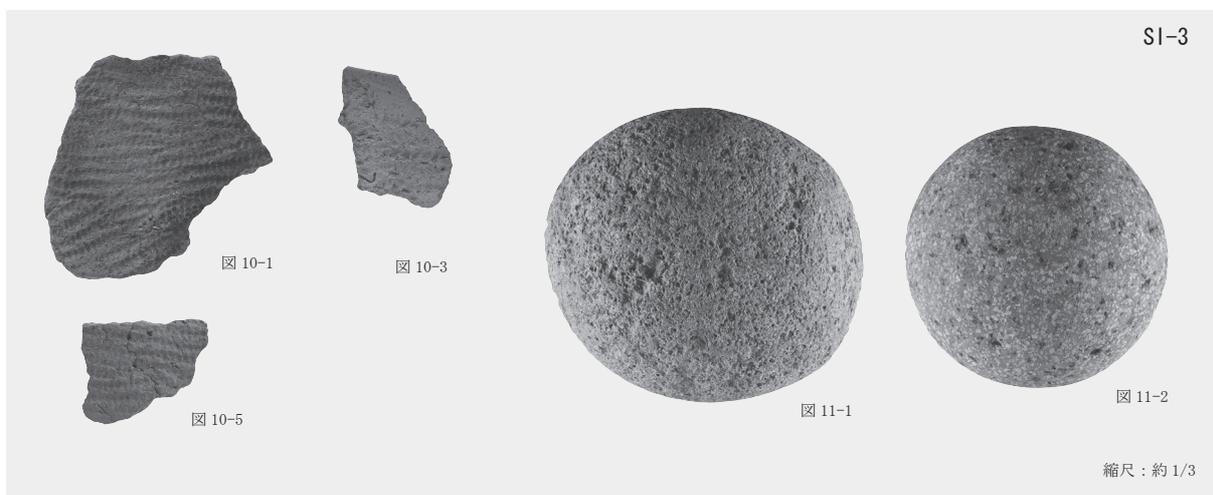
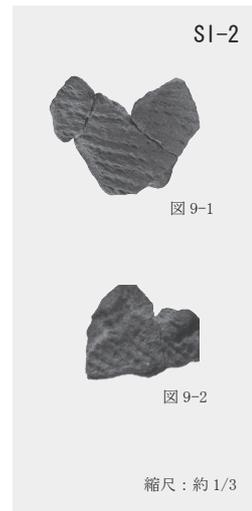


4b 区遺構検出状況 南西から

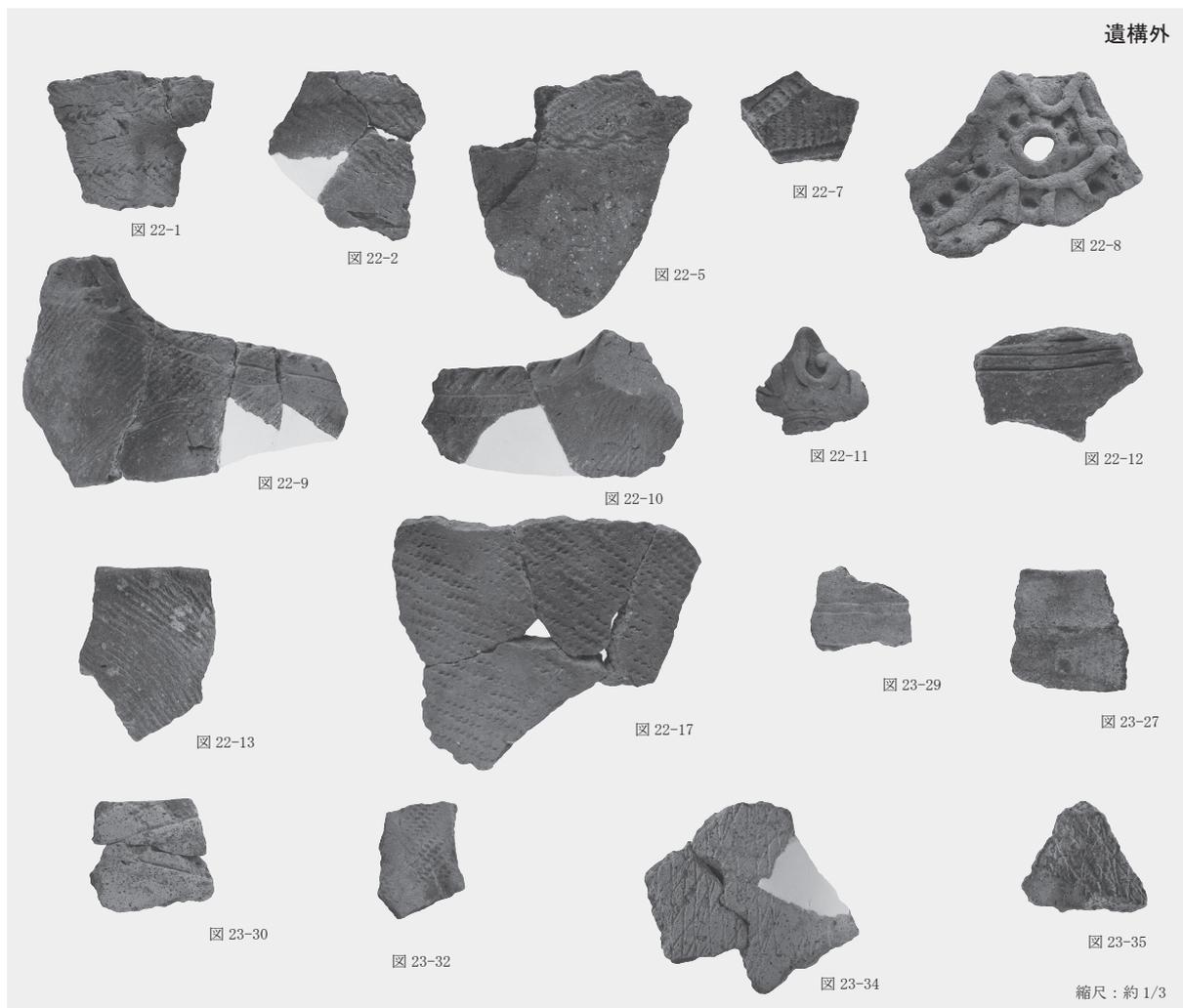


第5号竖穴住居跡検出状況 西から

写真図版 8



写真図版 9



写真図版 10

遺構外



図 23-38



図 23-45



図 23-46



図 24-50

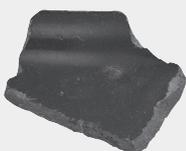


図 24-51



図 24-52



図 24-53



図 24-54



図 24-55



図 24-56



図 24-57



図 24-58



図 24-59



図 24-60



図 24-61



図 24-62



図 24-63



図 24-64

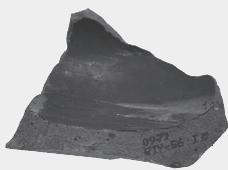
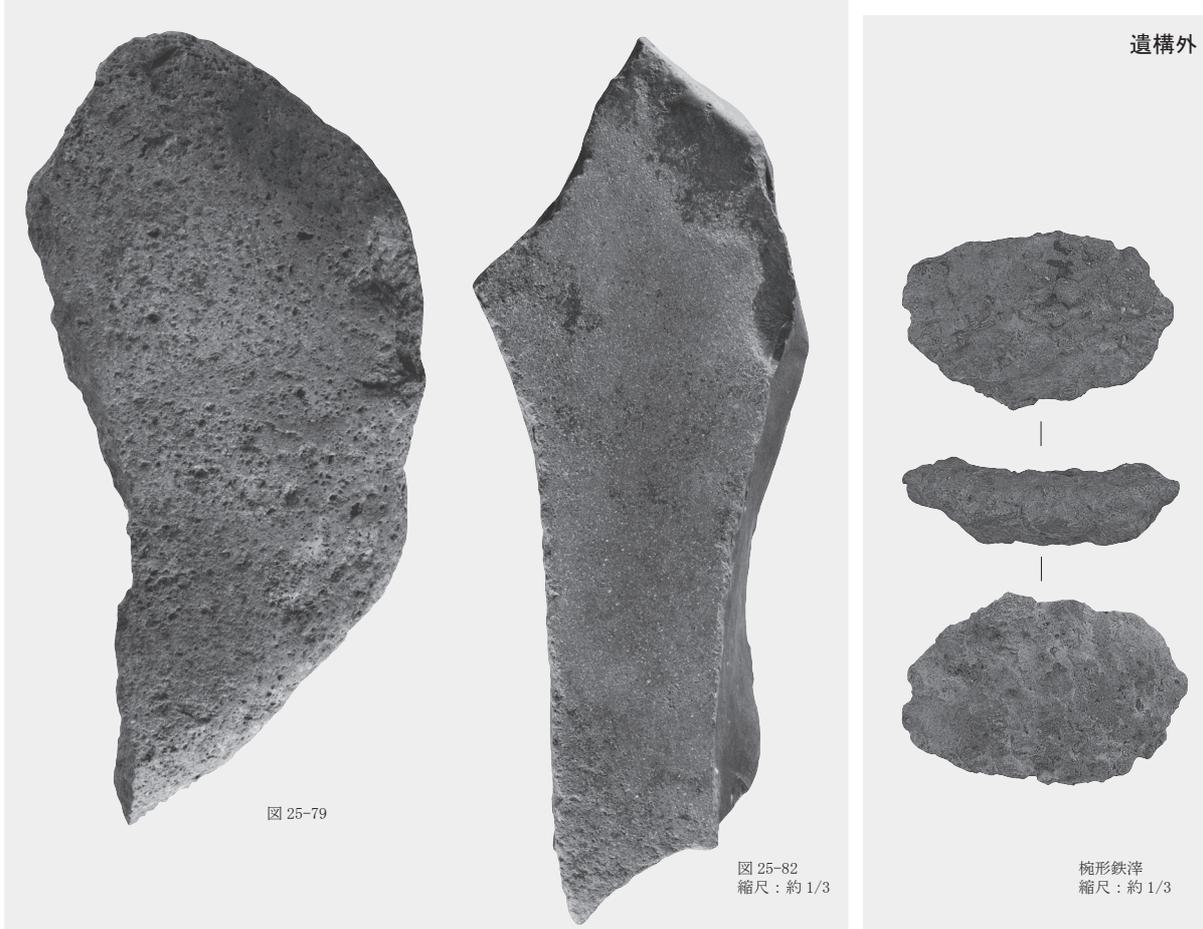
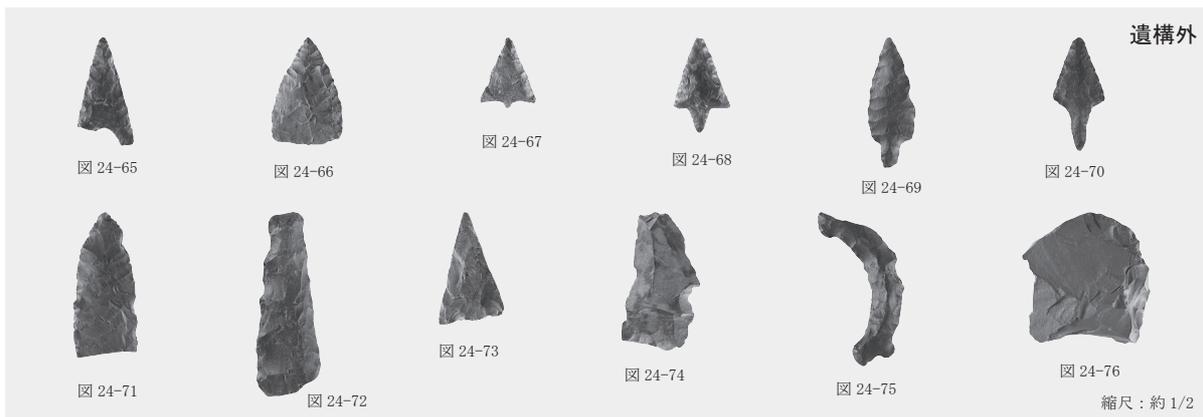


図 25-86



縮尺：土器 約 1/3 陶磁器・銭貨 1/2



写真図版 12

報告書抄録

ふりがな	まつがさきいせきさん							
書名	松ヶ崎遺跡Ⅲ							
副書名	一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第497集							
編著者名	能代谷 征則 中村 哲也							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2011年4月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コ ード	遺跡 番号	日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査 面積	調査原因
まつがさきいせき 松ヶ崎遺跡	あおもりけんほちのへしおお 青森県八戸市大 崎とおかいちあさかぜさらい 字十日市字風湊 9-1、ほか	22039	203068	北緯	東経	20090804 } 20091021	3,800 m ²	一般国道 45号八戸 南環状道 路建設事 業に伴う 事前調査
				40° 28' 40"	141° 31' 04"			
				世界測地系 (JGD2000)				
				北緯	東経			
				40° 28' 50"	141° 30' 51"			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
松ヶ崎遺跡	集落	縄文時代 中期～ 後期初頭		竪穴住居跡 4軒 土坑 4基	縄文土器・石器	竪穴住居跡1軒は保安上の 問題で未精査。		
	生産	縄文時代		溝状土坑 4基				
	集落	古代		竪穴住居跡 1軒				
	不明(縄文時代 以降)	不明		溝跡 3条				
	散布地	中世～近世			陶磁器・銭貨(寛 永通宝)			
<p>要約</p> <p>松ヶ崎遺跡は、八戸市中心部から南方に約4Kmの段丘上に位置する。標高は35m前後である。平成21年(2009年)の発掘調査の結果、縄文時代・古代の遺構、縄文時代・古代・中世・近世の遺物が確認された。松ヶ崎遺跡は縄文時代前期～中期の大規模な遺跡として知られているが、平成21年度の調査区では遺構密度が低く、検出された遺構はいずれも縄文時代中期のものと考えられた。調査区周辺は縄文時代中期に集落の縁辺部であったと考えられる。</p> <p>縄文時代前期後半～晩期のいずれかの時期には陥穴が構築され、狩猟場として利用されたと考えられる。</p> <p>古代の竪穴住居跡が1軒確認されており、これまでの知見とあわせて、遺跡北部は古代の集落の一部であったと考えられる。</p> <p>中・近世の遺構は確認されなかったが、陶磁器・寛永通宝が出土している。また、詳細な時期は不明であるが、溝跡が3条検出されており、古代以後も断続的に土地利用の痕跡が確認できる。</p>								

青森県埋蔵文化財調査報告書第497集 松ヶ崎遺跡Ⅲ

—一般国道45号八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2011年4月27日

発行 青森県教育委員会
〒030-0801 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702

印刷 高金印刷株式会社
〒038-0015 青森市千刈二丁目1-30
TEL. 017-781-2244 FAX. 017-781-2509